

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

マホメット伝

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用的範囲でお願い致します



大川周明
マホメット伝

書肆心水

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

マホメット伝

目次

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 アラビア及びアラビア人

- | | |
|---------------|----|
| 一 アラビア | 一七 |
| 二 「天幕の民」 | 二一 |
| 三 「屋壁の民」 | 二六 |
| 四 アラビア人の宗教的信仰 | 三三 |

第二章 マホメットの祖父と父、その青年時代

- | | |
|---------------------|----|
| 一 マホメットの祖父と両親 | 四〇 |
| 二 マホメットの誕生とその幼時 | 四九 |
| 三 マホメットの青年時代 | 五六 |
| 四 ハディイージヤとの多幸なる夫婦生活 | 六一 |

第三章 宗教、社会改革運動の開始

- | | |
|------------------|----|
| 一 将に妥協せんとしたマホメット | 七〇 |
| 二 ユダヤ人との交渉 | 八三 |
| 三 断交廃止と二つの試練 | 八六 |
| 四 ターリフ伝道 | 九〇 |

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

SAMPLE
Shoshi-Shinsut.com

第四章

聖遷^{ヘジラ}とメデイナとメッカの対立

一〇九八七六五

一縷の光明

アカバ第一宣誓

九五

天路歴程

九九

ペルシア敗北の予言

九九

メデイナよりの吉左右を待つ間

一〇五

アカバ第二誓約の夜

一〇七

クライシユ族の疑惑

一〇八

マホメットの脱出

一一六

メッカ最後の三年間の説教

一二四

マホメットのメデイナ入り

一二九

メデイナ移住の当初

一三二

メデイナの不平党

一三七

メデイナのユダヤ人

一三八

メデイナ、メッカの対立

一四一

バドルの会戦の前

一四五

バドルの会戦

一四九

バドル会戦の意義

一六五

第五章 メディナとメッカの死闘続く

一 反対者の圧服	〔七〕
二 ユダヤ人カイヌカー族の追放	〔七三〕
三 糧囊事件	〔七五〕
四 ウホド会戦	〔八一〕
五 ウホド敗戦の影響	〔九六〕
六 アラビア諸族の向背	〔九九〕
七 ザイド・イブン・サービット	〔一〇八〕
八 第二バドル役	〔一〇九〕

第六章

政治家マホメットと結婚

一 戰時礼拝の規定	一一一
二 マホメットの結婚	一一三
三 ムスタリク族の討伐	一一五
四 第七妻を娶る	一一九
五 アーライシャの醜聞	一一〇
六 メディナ包囲	一一五
七 ホライザ族の剿滅	一一一

SAMPLE Shoshi-Shinsu.com

第七章 対外使節の派遣とメッカの征服

遷都五年間の啓示	一三六
遷都六年（六二七、六二八年）五十九歳	一三七
アブー・ル・アース	一三八
使節をローマ帝国に送る	一四一
第二次ドゥーマ遠征	一四二
ユダヤ人族長アブー・ラーフィの暗殺	一四三
ウサイル殺さる	一四四
メッカ巡礼の熱望	一四七
ホダイビーヤ滞在	一四八
六使節派遣	一四五
ハイバル征服（遷都七年、六二八年八、九月）	一五九
まじないの話	一六四
その他の遠征	一六五
メッカ巡礼	一六五
遷都八年（六二九年）春夏遠征	一七〇
ムータの大敗	一七〇
その他諸族の討伐	一七四
メッカ征服	一七六

SAMPLE Shoshi-Shinsui.com

第八章 メッカ支配者アブー・スフィヤーンとイブラーヒームの死

アブー・スフィヤーンの交渉	二六〇
ホナイーン会戦	二八九
ターアイフ征服	二九三
鹵獲品の分配	二九五
家庭の出来事	二九九
イブラーヒームの死	三〇一

第九章 メッカ支配と聖遷(ヘジラ)十年（六三一年）

メッカ征服の意義	三〇三
捐課徵収	三〇四
遷都九年夏の事件	三〇七
諸方よりの使節	三〇八
タブークの遠征	三〇九
ターアイフ有力者の殉教	三一五
ターアイフの帰信	三一六
四方の使節	三一〇
遷都十年帰順の諸部族	三一三

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

一〇 遷都十年の遠征 三三五

第十章 別離の巡礼とマホメットの死

最後巡礼.....	三二七
三人の偽予言者.....	三三三
マホメットの発病.....	三三五
病革まる.....	三三五
シーア派のマホメット臨終記.....	三四二
メディナ市民の策動.....	三五〇
メディナ市長の策動.....	三五八
アブー・バクル、カリフとなる.....	三六〇
埋葬.....	三六二
人間としてのマホメット.....	三六四
イブン・サアド伝のマホメット.....	三六七

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

マ
ホ
メ
ツ
ト
伝

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

凡例

- 一、本書は大川周明の遺稿（未定稿）「マホメット伝」を単行本化したものである。底本には一九六二年刊行『大川周明全集第三巻』（大川周明全集刊行会）を使用した。
- 一、漢字は新漢字の標準字体、仮名遣いは現代の仮名遣いで表記した。
- 一、送り仮名は現今の一般的感覚でその過不足を加減した。ただし送り仮名を一つに定めかねる場合はそのままにした。
- 一、底本の鉤括弧遣いは『 』の形式であるが、本書では「 」の形式とした。ただし書名の場合には『 』で括った。
- 一、読み仮名ルビは適宜追加した。ただし複数の読みがあるものは読み仮名ルビの附加を避けた（例、確証॥ぎょうかく／こうかく、數多॥あまた／すうた）。
- 一、踊り字（繰り返し記号）は「々」のみを使用した。
- 一、正誤を判断しかねる場合などに原文のままの意味で使用する「ママ」のルビは（ ）で括り（ママ）と表記した。底本にはごく明らかな誤植が多数見られるが、これは特にそのむね指摘することなく訂正した。クルアーン（コトラン）章節番号の誤りも、ごく明らかな場合には特にそのむね指摘することなく訂正した（章節番号は大川周明訳『古蘭』のものに拠った）。
- 一、句読点を適宜補つた。
- 一、目立つ表記の不統一は原則的に頻度の高いものに揃えた（例、ウムム／ウム、Umm/Um）。

一、底本においてアブーおよびバニーのローマ字表記がそれぞれ悉く Abu, Bani となつてゐるが、他との統一感の観点から本書ではそれぞれ Abū, Bāni と表記した。

一、本書刊行所による註釈は＊印を附して割註あるいはルビ書きで記した。

一、現今一般に漢字表記が避けられる傾向のあるものは仮名表記に置き換えた。置き換えたものは五十音順に次の通り（送り仮名と活用語尾は代表例のみを表示）。

亜細亜→アジア、宛も→あたかも、阿佐利加→アフリカ、些か→いささか、孰れ→いずれ、苟くも→いやしくも、愈々→いよいよ、印度→インド、埃及→エジプト、斯かる→かかる、是かる→かかる、是く→かく、且つ→かつ、曾て→かつて、希臘→ギリシア、基督→キリスト、是う→こう、斯う→こう、咖啡→コーヒー、茲→ここ、此処→ここ、此処彼処→ここかしこ、御座います→ございます、悉く→ことごとく、此の→この、此→これ、是れ→これ、之→これ、君府→コンスタンチノープル、併し→しかし、而も→しかも、屢々→しばしば、其処→そこ、其の→その、度い→たい、啻に→ただに、忽ち→たちまち、設い→たとい、何う→どう、偕に→ともに、尚お→なお、乍ら→ながら、勿れ→なけれ、巫山戯る→あざける、波斯→ペルシア、略々→ほほ、亦→また、亦復→またまた、儘(尽)→まま、若し→もし、齋す→もたらす、固より→もとより、稍(々)→やや、猶太→ユダヤ（ユダヤはユダヤに表記統一した）、欧羅巴→ヨーロッパ、約翰→ヨハネ、羅馬→ローマ

SAMPLE
ShoshiShinsu.com

書肆心水提供サンプル／個人使用の範囲でお願い致します

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第一章 アラビア及びアラビア人

一 アラビア

アラビアは、北はシリア沙漠、東はペルシア湾及びウマーン湾によつてアジアの自余の国土と隔てられ、西は紅海によつてアフリカ大陸と分かたれ、巨斧の刃に似たる姿をインド洋上に展示居る。それは一個の半島なるに拘らず、アラビア人自身はこれを「アラビア人の島」と呼んだ。まことにアラビアは、アジア・アフリカ・ヨーロッパ三大陸を結ぶ形勝の地に位しながら、マホメットが出現するまでは、永く孤島的存在を続けて来た。シリア沙漠の北に於て、紅海の彼岸に於て、またペルシア湾の彼岸に於て、幾多の国家が興亡し、幾多の民族が去來したけれど、辺境諸地方を除くアラビア内部の沙漠のアラビア人は、殆ど外界と隔絶して太古以来の生活を続け、

如何なる国家もその完全なる支配をこの確固不毛の国土に及ぼせるものなく、永く世界の未知の「嶋」として残された。

さてアラビアの地勢は、紅海に面する西部に於て高く、ペルシア湾及びメソポタミア平原に向かって、緩傾斜をなして東北に低下して居る。或る時は山裾を波に洗われ、或る時は海より遠ざかりながら、赤色の砂岩及び班岩より成る陰鬱なる山脈が、紅海に沿いて蜿蜒南北に走り、北方ミディヤーに於て海拔九千フィート、南方ヤマンに於ては實に一万二千フィートに達して居る。山脈の西側なる沿海低地はティハマと呼ばれる。山脈の東側に位する北方の基地ナジドは、アラビアの心臓部と呼ばれ、平均高度二千五百フィート、この基地を東西に走るシャムマル山脈の最高峰アジャ山は、海拔五千五百五十フィートに達する。半島の東部は一般に低地であるが、ウマーンのアクダル山は海拔九千九百フィート、東海岸唯一の例外をなして居る。

上述の山脈並びに基地を除くアラビアの大部分は、沙漠と草原である。沙漠はヌフード・ダハナー・ハラハの三種に分かたれる、ヌフードは北部アラビアの大部分を占める白色又は褐色の砂礫の起伏地帯であり、シリア及びメソポタミアの沙漠もまたこれに属する。そは若干のオアシスを除けば乾燥不毛の地であるが、冬期に降雨充分なる時は、一朝にして満目綠野と化し、駱駝及び羊の楽園となることもある。

ダハナーは、北はナジドより南はハドラマウト、東はウマーンより西はヤマンの境に至る茫茫たる赤砂の沙漠であり、面積実に三万方マイル、地図には一般にラブルカーリと記されて居る。

ラブルカーリは「空虚の地」を意味する。その若干の個処では、冬期に降雨あれば緑草萌え、三ヶ月間は駱駝と羊とを牧するに足るが、概して言えば生物の影だなき焦熱地獄である。

第三のハラハは、粗鬆なる溶岩を以て蔽われたる礎確地帶で、人間も動物も足を傷つけずにそのまま通行し難いと言われる。半島の西部及び中部の隨處に存在し、北方はハウラーンに達して居る。

アラビアは、ヨーロッパの約四分の一、中国本部の約三分の二に匹敵する広大なる面積を有しながら、一年を通して水ある河川は一筋もなく、あるものは唯だ河渓即ちワーディである。ワーディは即ち乾ける河床で、降雨の後には水を湛え、時には濁水奔流することもあるが、海に到らぬ前に熱砂のために呑まれ去る。主要陸水の発源地は言うまでもなく西部の沿海山脈で、ここより紅海に向かうワーディは、深い侵蝕谷床を形成し、灌漑に利用されて居る。これに反してペルシア湾に向かうワーディは、緩傾斜の地勢に相応して谷床は深からず、僅かに水準面に近く陥没して居るにすぎない。その最も大なるものに、スイルハーン及びルムマハの南河谿がある。かようにしてワーディには、恒常的な表面水は見られないけれど、水は地下水として存在するため、井戸を掘つてこれを利用することも出来るし、時としてはそれが自然に泉となりて湧出するところもある。かようにして生じたる綠地のことを、ギリシア人はオアシスと名づけた。

オアシスでは、小麦・大麦・燕麦・黍・粟などが栽培され、ウマーレン及びハサの耕地では米を産する。ヒジャーズのターリフは、古より葡萄の产地として聞こえ、その他諸処のオアシスに柘産する。

榴・林檎・杏・レモン・オレンジ・水瓜・バナナなどを産する。アラビア海に面する半島の南部沿海基地には、古代に於て甚だ珍重せられし乳香や没薬を産し、またヤマンでは世界にその名を知られたるコーヒー樹が栽培されて居る。しかもアラビアに於て比類なく重要な植物は棗椰子であり、到る処のオアシスに栽培せられ、果実はアラビア人の常食であり、核を碎いて造れるケークは駱駝の常食である。

草原地帯では、アラビア経済の主要部門である羊・馬・駱駝の放牧が行われる。馬はキリスト紀元前後にシリアから輸入され、アラビアに於ける最も贅沢なる家畜として、これを所有することは直ちに富者の証左となる。馬がアラビア人に重んぜられるのは、疾風の如き駿足が、彼等の生業なりし掠奪に最も必要なりしためである。飲む水なくしてその子が泣いて渴きを訴える時でも、馬の飼主は最後の一滴をその子にではなくその馬に与える。かような愛育によつてアラビア馬は、その颯爽たる姿、その耐久力、その聰明、その忠誠に於て、實に世界無比のものとなつた。

馬がアラビアの最も貴重なる家畜であるとすれば、駱駝は疑いなく最も有用なる家畜である。駱駝なくしては、恐らく沙漠は人間の住処となり得なかつたであろう。そは冬期ならば二十五日間、夏期にても五日間は、全く水飲むことなくして主人のために荷を運ぶ。しかも駱駝は単に沙漠の「舟」たるには止まらない。彼等の主人はその乳を飲み、その肉を食い、その皮を纏い、その毛を以て天幕を作り、その尿を焚き、その尿をマラリヤ及び熱病の薬として飲む。第二代カリーフア（*カガハリ）のウマルは、駱駝栄える時にのみアラビア人は栄えると言つたと伝えられ、

シユプレンガーはアラビア人を「駱駝の寄生者」と言つて居る。

さてアラビアは、世界に於て最も乾燥せる、また最も高温なる国土の一つである。この高度の乾燥が赫灼たる太陽の暑熱を比較的堪え易きものとし、かつ夜間に於て急激なる冷却を導く。アラビアの沿海低地は不健康地であるが、中央部の基地に於ては死亡率低く、甚だ長寿者が多い。現にアラビア沙漠を旅行した人々は、異口同音に沙漠の空気の新鮮爽快を讃美して居る。身体を強壯ならしめる第一の条件は、多くの場合は食物であるが、アラビア沙漠では、空氣又は気候の優性が、食物の欠乏を補い得て余りあるかに見える。

半島の中央部には全く雨を見ざる地方があり、ヒジャーズの如きも、三年に亘りて一滴の雨も降らぬことがある。但し沿海山脈の西側一帯は、時として車軸を流す豪雨に襲われ、その時にはメッカやメディナの町が洪水に見舞われる。唯だヤマンは夏期季節風に恵まれて、高山の斜面に至るまで極めて肥沃である。北部アラビアでは、地中海の影響を受けて冬期及び春期に僅かながら雨が降り、また東南のウマーン高地にも若干の降雨がある。また北部の高山には雪を見るし、西部沿海高地には霜が降る。

二 「天幕の民」

アラビアは多くの学者によつてセム民族の搖籃とされて居る。しかもその民は太古よりつぎつ

ぎにこの荒涼たる故土を去り、先ず豊沃なる小アジアに移り、東はイラン高原、西は地中海より北_{アーリカ}一帯の地に分布し、バビロン人・アッシャリア人・フェニキア人・ヘブライ人の名の下に、それぞれ世界の文化に貢献したが、独りアラビアの故土に残れるアラビア人のみは、茫茫たる沙漠によつて自余の世界と隔離せられ、マホメットの世に出るまでは、世界史の舞台に如何なる役割をも勤めなかつた。

かようにしてマホメット出現以前のアラビア人の生活は、最も善くセム民族の原始的社會狀態を彷彿せしめ、概ね遊牧を事として天幕の中に住み、自ら「天幕のアラビア人」と誇つて居た。羊を牧し、駱駝を牧し、馬を牧すること、狩獵を試みること、そして掠奪を行うことが、實に彼等の生活であり、男子の名に値する仕事とされた。彼等の或る者は農耕に従い、また或る者は商売を営んだが、それは真個のアラビア人に適わしからぬ仕事と考えられた。

さて沙漠は、これに住む者にとりて決して單なる棲息地でない。それは彼等の神聖なる伝統の貯蔵庫であり、言語と血液の純潔を守る保護地であり、また外敵に対する無上の防護地である。焦_{アラビア}くが如く暑く、水に乏しく、食糧の供給なく、辿るべき路なき沙漠に住みたればこそ、彼らは異邦の羈絆を受けずにすんだのである。而してこの沙漠の単調・欠乏・峻酷は、彼等の精神と肉体との上に顕著に反映して居る。彼等は適切無比に沙漠の児である。

沙漠のアラビア人即ちバダウイー人は、先ず神經と骨と腱との集結ともいすべき彼等の体軀に於て、最も善く沙漠の礪石と窮乏とを表現して居る。寒暑飢渴に対する驚くべき忍耐力は、沙漠

に生活する間に否応なく養成された彼等の特性である。掠奪もまた、沙漠生活の社会的・経済的事情の自然の所産であり、ただに罪悪に非ざるのみならず、男子に適わしき生業と考えられた。護る者なくして彼等の部落に入り来る異族者の所持品は、当然強者の手に歸すべき獲物とせられ、これを掠奪することは正当なる仕事であつた。一詩人はかく歌つた——「吾等の仕事は敵より掠奪すること、隣人より掠奪すること、他に相手なき時は兄弟より掠奪すること。」但し掠奪に際して血を流すことは、非常の場合を除けば最も嚴重に禁ぜられて居た。ラツツエルが中央アジアの遊牧民について述べて居ることは、殆どそのまま、沙漠のアラビア人に該当する——「遊牧民は、経済的意味では牧畜者であり、政治的意味では戦士である。彼等にとりて戦士の行為と強盗の行為とは、殆ど区別されて居ない。生活の一面は平和的であり、他の一面は強盗的である。彼等は場合々々に応じて、これを取り、彼を択ぶ。外見は如何にも長閑なる牧畜生活の推移は、取りも直さず戦闘生活の推移であり、牧畜の鞭はたちまち武器と變る。秋に至りて肥馬牧野より歸り、第二の羊群完成すれば、彼等の問題とするところは、如何なる方面に復仇又は掠奪の遠征を試むべきかに在る。」

沙漠の生活は、また彼等を不羈奔放ならしめた。彼等は徹底して自由を愛する主我主義者であり、従つて主我主義者的一切の長短多面を遺憾なく具えて居る。彼等は矜高自負であり、利己的であり、貪欲であり、頑強であり、執拗であり、不撓不屈である。自然にもせよ、禽獸にもせよ、乃至人間にもせよ、いやしくも彼等の存在を脅す敵に対し、飽くまでも抗争を続ける彼等のみ

が、能く彼等とその駱駝とをして、他の如何なる者も堪えまじき環境に於て生存し繁殖するを得せしめた。

古代詩歌に現れたるところによれば、アラビア人の道徳的理想は「男らしきこと」であり、男らしきこととは、勇氣あること、忠誠なること、及び物惜しみせぬことであつた。その勇氣の有無は、掠奪の回数によつて知られ、物惜しみせぬことは、如何にその客を歛待するかによつて知られる。蓋し客の歛待は、アラビア人の最も尚ぶところにして、総ての詩人はこの徳を讃美して倦むことを知らない。雨降り注ぎて、焦土頓に緑野と化し、牝駱駝の乳房膨れる豊年には彼等はたちまち長者となり、最も惜しみなく客を歛待する。然らざる時でも、彼等は己れ飢えてもその客を満腹させようとするのである。

また彼等は詩歌と雄弁との熱愛者である。彼等はアラビア語を以て最勝無上の言語と信じ、かつこの自負に伴いて古より雄弁を讃美し、實に徳行の一つとしてその練習に努め、雄弁家は人々の深甚なる尊敬を受けて來た。詩歌に至りては一層彼等の愛好するところであり、ただに自らこれを楽しむのみならず、家族又は部族の最も欣ぶ清遊の一つは、相会して各自の創作を誦出し合うことであつた。殊に毎年時を定めて開かれるウカーズ及びマジャンナの市に当りては、各部族がそれぞれ己れの桂冠詩人を出場せしめ、重大なる歌合戦が行われた。この合戦に優勝せる詩歌は、黄金の文字を以てエジプト絹の上に書かれ、メッカ聖域の方形殿の壁に掲げて、無上の名譽をその作者に与える習慣であつたと伝えられる。

さてアラビア人は、アブラハムの子イシマエルの子孫であると信じて居た。そのイシマエルについて旧約聖書の創世記は下のように述べて居る——「彼は野驥馬の如き人とならん。その手は総ての人に敵し、総ての人の手は彼に敵すべし。」幾多の部族に分れ、総ての部族が総ての部族を敵とする点に於て、沙漠のアラビア人はまさしくイシマエルの子孫であつた。一天幕に一家族住み、数多の天幕相集まりて一部落を成す。部落の成員は即ち一氏族であり、数多の氏族相集まりて一部族を成す。同一部族の成員は、血液を同じゅうする同胞として生活し、一人の族長シヤイフを戴く。族長は部族内の有為なる年長者のうちから選ばれる。族長は往々にして想像されるような專制者ではなく、却って「総ての人々のうちの最も卑しき僕」たるべきことを要求せられ、また「常にその家を開放し、溫和に物言い、何ものをも他人に求めず、貧者にも富者にも鄭重なること」を要求される。彼は決して肆ハシイマヌに部族に命令し又は指揮することは出来ない。彼は部族の長老たちを召集し、部族に関する総ての事柄を彼等との談合によつて決めねばならぬ。もし専横を敢えてするならば、不羈奔放なること悍馬の如き民のために、晩かれ早かれ葬り去られるであろう。

部族の成員は、部族に対して絶対の忠誠を要求される。セム民族に通有なる部族的感情は、アラビア人に於てわけても強烈であつた。部族の無上法は、血に血を以て報ゆる復仇であつた。部族の成員の生命を護ること、及び「目には目、歯には歯、生命には生命」の原則に従い、他部族のために傷つけられ又は殺されし成員の仇を復すことが、部族の履行すべき最も神聖なる義務と

された。かようにして復仇のため謂わゆる「族鬭」が間断なく行われた。沙漠のアラビア人の歴史は、かくの如き族鬭の繰り返しに終始した。そしてこの族鬭は、アラビア人の部族生活を国民生活に向上発達せしむべき一切の道を杜絶したのである。

三 「屋壁の民」

純乎として純なるアラビア人が、自ら「天幕の民」と誇り、沙漠を自由の天地として、太古以来の部族的生活を送りつつありし間に彼等の或る者は半島の沃地又は隊商路の要衝に定着して、謂わゆる「屋壁の民」となり、農業及び商業に従事して、沙漠の南北に大小の国家を建設した。

既に述べたる如く、アラビアに於て最も天恵に富めるは、半島の西南隅に位し、ギリシア人によつて「多幸のアラビア」と呼ばれしヤマンである。夙既に西紀前一三〇〇年のころ、ミナ人がここに國家を建設し、一時南アラビアの殆ど全部に君臨した。やがて西紀前九五〇年ころ、サバア人もまた一国を建て、西紀前六五〇年ころには、ミナ人に代つて南部アラビアの覇権を握つた。この時より五百年の間は実にヤマンの黄金時代であり、その広大なる貯水地、その堅固なる城廓、その宏壮なる神殿の遺跡は、明らかに彼等の繁栄と勤勉と敬虔とを物語る。その後西紀前一一五年に至り、ヒムヤール人が彼等の後を継いで南部アラビアに君臨し、西紀三四〇年ごろ一旦アビシニアのために征服されたが、四十年にしてまた独立を回復し、西紀五二五年に及んだ。

しかも南部アラビアの勢力は、前期ヒムヤール時代に既に衰え初めて居た。蓋しヤマンの繁栄は、その形勝の位置を利用して、ただに自国の物産のみならず、インド並びに東アフリカの物産を集め、これを駱駝の背に積みて、ヒジャーズを経てシリア及びエジプトに送り、その有利なる商売を独占し来たれる故である。ヤマンよりアカバに至る隊商路は、ストラボーによれば實に七十日行程にして、その間に多数の隊商宿駅があつた。西方諸国が東洋の織物・香料・薬味などに對する嗜好と需要とを昂めるに従い彼等は自国の物産、わけても乳香や没薬などの價格を引き上げ、かつ彼等の手を経る東洋貨物よりの通過税を高くした。かようにして彼等は存分に富み栄えることを得たが形勢は次第に変わり初めた。

西方諸国がこの有利なる通商に於て南部アラビアと角逐しようとしたのは、決して一朝一夕のことではない。既にプトレミニ二世（西紀前二八五—二四六年）が、この時より一千八百年の昔にエジプト王セソストリスが開鑿^{かくしょく}せるナイル河と紅海とを結ぶ運河を再開した。かようにしてエジプト商船が紅海に闖入し來たることが、ヒムヤール人の商業的独占に対する最初の打撃となつたが、ローマがエジプトを征服してからは、一層この政策が強行され、ローマ商船はただに紅海のみならず、インド洋にまで進出するに至つた。この強力なる競争のために、ヤマンは次第に經濟的に衰微した。經濟的衰微がやがてヤマンの政治的無力を招いたことは言うまでもない。

また後期ヒムヤール時代に、キリスト教及びユダヤ教がヤマンに普及し始めた。キリスト教は夙^はくよりアラビアの北部に知られて居たが、西紀三五六六年、東ローマ皇帝コンスタンティヌス二

世は、テオファイルスを首班とする一伝道團をヤマンに派遣した。テオファイルスはアデン及び他の二個處に礼拝堂を建立した。その後西紀五〇〇年ころ、ナジラーンのハーリス族が大挙キリスト教に帰依した。但しユダヤ教は一層弘くヤマンに行われ始めた。ユダヤ人が多く南下し始めたのは西紀前七〇年、ローマ皇帝ティトウスによるパレスティナ征服以後のことであるが、故国を失える彼等はアラビアの諸處に定着して農業並びに商業を営み、カイル・メディナ・ターアイフなどに有力な地歩を築いて居た。わけてもヤマンに於ける彼等の勢力は目ざましく、ヒムヤール國最後の君主となるズー・ヌワースは、ユダヤ教に帰依してその名をヨセフと改めた。彼は海を越えてヤマンに進出せんとするアビシニアの侵略と戦ったが、恐らくナジラーンのキリスト教徒がアビシニアに内応せんことを惧れ、西紀五二三年北伐軍を起してこの町を陥れ、市民の殆ど全部を火坑に投じて虐殺した。そのためアビシニア国王は、ローマ皇帝ジュスティヌス一世の同意又は勧誘により、西紀五二五年、七万の大軍をアデンに上陸せしめてヤマン討伐の戦を開始した。そして西紀五二九年、ズー・ヌワースが私怨のために暗殺されたので、その後七十六年の間、ヤマンはアビシニアに隸属することとなつた。

アビシニア人は、ヤマンにキリスト教を復興するため、先ず莊嚴なる礼拝堂をサナーに建立した。そして太古よりアラビアの宗教的中心たりしメッカに代つて、多くの巡礼者をここに誘致しよう企てた。そのため西紀五七〇年、時のヤマン総督アブラハはアビシニアより独立して自らヤマン王となり、遂にメッカ遠征を敢行するに至つた。アブラハはこの北伐軍に一頭の象を伴つ

た。この巨大なる動物は、ヒジャーズ人の未だかつて見ざりしところのものであつたから、深刻なる印象を彼等に与え、この年を「象の年」と呼ぼしめるに至つた。遠征軍はメッカ郊外に迫り、メッカの運命累卵の如く危かつたが、突如陣中に急激なる伝染病（恐らく天然痘）が発生したので、目的を遂げずして空しく帰還した。マホメットはこの「象の年」に生れたとされて居る。その後西紀六〇三年に至り、ヤマン人はペルシアの援助によつてアビシニア人を国外に駆逐したが、その代り今度はペルシアの保護領となり、西紀六三四四年に回教圏に併合された。

さて西紀第一世紀の中葉に、ヤマンの林野に灌漑する巨大なるマリグ貯水池が氾濫崩潰し、そのためには多数のヤマン人が耕すべき土地を失つた。かくて彼等はアラビア半島の東海岸並びに西海岸に沿うて北方に移住し、先ず西紀第三世紀初頭、オイフラート河の西方にヒーラ国を建て、次いで第三世紀末葉、シリアにガッサーン国を建てた。その後第四世紀に至り、ヒーラ国より岐れてキンダハ国が建設され、一時北部アラビアの諸部族に君臨した。これ等の国々は、淪落に瀕しながらも常に抗争を続けて居たペルシア・ローマ両帝国の間に介在し、回教圏に併合されるまで、それぞれ両国の一つに半隸属の姿で存続した。

叙上諸国以前に於て、特に注意すべき「屋壁の民」は、ヤマンよりシリアに至る隊商路の要衝に当れるヒジャーズの二都市、即ちメッカ及びヤスリブ……後のメディナである。

メッカは、殆ど一木一草もなき荒涼たる丘陵に囲まれて、洋風浴槽に似たる形せる谿谷に建てられ、暑熱は強烈、空氣は乾燥、甚だ不健康なる土地であるが、アラビアを横断して紅海よりペルシア湾に至る隊商路と、これを縦断してヤマンよりシリアに至る隊商路とが、丁字形に相会する地点に位して居る。そしてここにはハガルとその子イシマエルとを渴死から救つたと伝えられる名高きザムザム井がある。その水は塩分を含みて不斷の飲料に供すべくもないけれどこの井の存在が当初メッカを隊商宿駅たらしめた重要な条件の一なりしことは疑いない。既に述べたる如く、ヤマン人は太古より南部アラビア・東アフリカ・乃至^{ないし}インドの貨物を、ヒジャーズを経てシリアル及びエジプトに運んで居た。メッカの民はこの驚くべく有利なる商売に垂涎し、富裕なるヤマン人を羨視して居たに相違ない。従つてローマ商船の紅海及びアラビア海進出によつてヒムヤールの国運衰微するに及び、メッカ人が彼等に代つて自らこの貿易を営まんとするに至ることは、極めて自然の経路である。この交代又は推移は極めて徐々に行われたに相違ないが、西紀第七世紀に入りてよりは、ヒジャーズを通過する隊商路は、既にメッカを根拠地とするアラビア人の支配下に立つて居た。彼等はヤマン人が南方より運び來たれる貨物をメッカに於て受け取り、これを自らシリアル及びエジプトに、また恐らくはペルシアにも輸送して、莫大なる利益を収めて居た。メッカ商人の或る者は、自らヤマンに赴いて商品を仕入れたが、彼等の主なる仕事は、ヤマン人やアビシニア人の運び來たれる貨物を買い取りて、これを北方諸国に輸出することであつた。かくてメッカ以北の隊商路は殆ど彼らの独占するところとなり、一切の南方貨物が殆ど

ことごとくメッカ商人の手を経るところとなつた。これによつて獲得せる彼等の利益は、實に従
価十割を常とした。ラムマンはその著『回教』の中で当時のメッカの状態を下のよう述べて居
る——「それは人間の蜂窩の騒音に襲われたる如き、又は現代の株式取引所の近處に居る如き感
を与える。ここにはそれと同様の昂奮、同様の利慾の熱狂、同様の投機熱、同様の急激なる致富
と破産とがある。メッカは相場師・仲買人・金貸しなどの樂園となつた。彼等は当時の如き時代
及び環境に於ての投資が、如何に大なる危険を孕んで居るかを念頭に置かぬ人々に、驚くべき高
利の金を貸し付けた。両替屋の店頭では、人々が為替相場の変動に夢中になつて居た。彼等は外
貨の高低、隊商の積荷、その到着及び遅着に金を賭けた。メッカにはローマ、ペルシア、ヤマン
などの諸国貨幣が流れ込んで居たこと、古代貨幣制度の複雑なりしこと、その処理換算に専門の
知識を必要とすることなどが、無限の手管と掛け引きとを誘致した」と。

同じくラムマンによれば当時のメッカには東ローマ帝国の代表者が常駐して居た。少なからぬ
ペルシア人の来往があつた。アビシニア人の一団が巡警として雇われて居た。これ等のアビシニ
ア人は殆どみなキリスト教徒であつた。多くのユダヤ人が在住せるることは言うまでもない。回教
の搖籃となれる当時のメッカは、普通に想像される以上に国際的なる商業都市であつた。

ヒジャーズ隊商路に関する唯一の競争者は、アカバ・アドウリス間の商船航路であつたが、東
ローマ帝国の衰微と共にその商業的活動も衰え、かつアビシニアは敢えて遠く北方までその貿易
圏を伸べようとしなかつた。かくマホメント出現直前、衰余のローマ・ペルシア両帝国が無益の

死闘を事としつつありしころ、メッカの繁栄は絶頂に達して居た。

次にヤスリブ即ちメディナは、北方に向かつて緩く傾斜する平野に位し、水に豊富なる点に於てアラビアでは希有である。多くの河床がみな南より北に向かい、ザガーバに於て合流し、イダム河谿に注ぎて海に嚮う。河床に水あるは降雨の時に限るけれど、井を掘りて容易に水を得らるるが故に、この地には夙より農耕が行われて居た。

ヤスリブの起原及びその最古の歴史については正確なる何事も知られて居ない。やや確實に知り得るはユダヤ人がこの地に定着してからのことであるが、彼等が初めて南下し来たれる年代もまた明らかにし難い。唯だ西紀第一世紀頃にはクライザ及びナズィールと呼ばれしユダヤ人の両部族が、この地に占拠して栄えて居た。然るにその後ヤマンに於けるマリブ貯水池の崩潰による南アラビア人の北方移住が開始せらるるに及び、アウス及びハズラジの両アラビア部族が、この地に来たりて土着することとなつた。彼等は長くユダヤ人の支配下に在つたが、第五世紀末葉に及んで、遂に彼等に代つてヤスリブの霸権を握つた。

彼等は從来ユダヤ人の占拠せる諸堡壘を略取し、更に若干の堡壘を増築した。そして優勢なるハズラジ族がヤスリブの主権を握り、居を市の中央部に占め、その南部及び東部にはアウス族が住んだ。これ等の両族以前に、彼等の移住以前よりこの地に住み、永年に亘りてユダヤ人と接触し、多かれ少なかれユダヤ化せる数個のアラビア部族も居た。そしてクライザ及びナズィールの

両ユダヤ族は、アウス族の下に或る程度の独立を保持しながら生活した。

かようやにヤスリブの状態は、アラビア人の支配の下に一応平和に落着したが、^{いよいよ}幾くもなくハズラジ・アウス両族の間に勢力の争奪を生じ、角逐は次第に激化して行つた。この争覇に於てハズラジ族が概ね優勢であつたので、アウス族はこれに対抗するため両ユダヤ族の援助を求めた。そしてその他のアラビア諸族も両部のいずれかに味方したので、ヤスリブは両派必死の争闘の舞台となり、市民は甚だしき不安の間に日を送らねばならなかつた。恰もこの時に当り、マホメットと呼ぶ異常なる人物がメッカに現れたるを知り、彼を迎えてヤスリブの統一と平安とを図ろうとしたのである。そしてヤスリブ市民が容易にマホメットの信仰を容れたのは、彼等が永くユダヤ人と密接なる関係を有し、獨一の神エホヴアに対するユダヤ教の信仰を熟知して居たからに外ならない。

四 アラビア人の宗教的信仰

マホメット出現以前のアラビア人の精神的生活は、これを詩歌及び伝説によつて判断すれば、ルナンが適切に指摘して居るよう、「浅薄にして非宗教的」であり、その宗教は甚だ低き発達の段階にあつた。若干の男神・女神の名前はあるけれど、それ等の神々の特性は明瞭ならず、従つてアラビアには神話も神学もなかつた。彼等は唯だ掠奪の獲物の多からんこと、豊かに雨降らん

ことを、それ等の神々に祈願して居たにすぎない。セム民族に通有なる天体崇拜はアラビアでも行われたが、農耕に従える部族は太陽を、牧畜を事とせる部族は月を崇拜した。

神々の崇拜は何等かの象徴を通して行われた。最も弘く行われし象徴は、多種多様の形をなせる石であった。アラビア人はそれ等の石を、或いはこれを祠の中に安置した。祠は立方形の建物である。祠の所在地には、概ね附近に聖泉あり、時として聖樹がある。祠を繞る一定の地域は「禁地」即ち聖域と呼ばれ、域内に於て人間並びに動物の血を流すこと、また域内の樹木の枝を折ることを絶対に禁ぜられた。人々は神を象徴する石に対し、或いはこれに接吻し、或いはこれを撫で、或いはこれに犠牲の血を注いで崇敬の情を表した。犠牲には駱駝・羊・牛が供えられたが、稀に人身供犠も行われた。そして祠の周囲を巡る儀式が、供犠と共に弘く行われた。

一定の時期に於て、祠を中心とする若干の部族が、相会して祝祭を行つた。祝祭の行われる月は聖月とせられ、これに参加する諸部族間の一切の争闘は禁ぜられ、多数の参詣者の間に盛んなる商取引が行われた。かかる祝祭のうち、ウカーナのそれは最も名高く、平日は殆ど住む者なき広野に、一朝にして見渡す限り天幕が張られ、幾千の参詣者が四方から集まる。そしてこれを目當てに、貨物を駱駝の背にのせたる多くの隊商が、遙かな遠国からも集まつて來た。

メッカもまたウカーナと共に名高き巡礼地であった。但しメッカは平日は漠々無人なるウカーナの原と異なり、甚だ狡慧なる市民が住まえる大なる町であり、この祝祭を最も有效地に利用する途を熟知して居た。ここにはメッカの方形殿を囲む聖域の外に、当初は恐らく独立せる聖地なり

シナ、サファー、やや離れてアラフアート丘などの聖地が、みな四方より集り来る隊商の駐屯地となつたので、メッカはただにアラビアの宗教的中心となるのみならず、その政治的・經濟的中心ともなるに至つた。但しアラビアには眞実の意味に於ける祭司階級の發達を見なかつた。

メッカの神職は単純に神殿の守衛即ち番人に外ならなかつた。

さてアラビア人の日常生活に最も重要な意義を有して居たのは、神々の崇拜よりも、むしろ幽鬼に対する信仰であつた。マホメット自身も堅く幽鬼の存在を信じ、従つて幽鬼は回教の信仰の対象ともなつたことは、後に述べる通りである。人間が土から造られたのに對し、幽鬼は火から造られ、男女あり老幼あり生死あり、その性質に善もあり惡もある。人目に触れずして隨處に來往し、或いは廃墟に、或いは街衢に、或いは河川に、或いは海洋に、或いは泉池に住む。そして彼等の本拠は神秘なる靈峰カフ山である。この山は無限のエメラルドの上に聳え、恰も指輪が指を囲むように世界を囲み、太陽はこの山の彼方より昇り、彼方に沈む。大空の蒼きはこのエメラルドのためである。

幽鬼は時として人間に宿る。然る時にその人は尋常の意識を失い、一層高き超人間的知識を得る。古蘭第五二章第二九節及び第六九章第四二節に述べられたる「ト者」とは、幽鬼によつて靈能を与えたる男又は女である。古蘭第一一三章には「纈を吹くの厄」を記して居る。糸を結びて呪文を唱えながらその結節を吹くことは、當時汎く行われし呪術であつた。そしてかくの如き幽鬼の害を免れるために、種々なる禁呪まじなが行われた。

但しアラビア人は、夙くより一層発達せる種々なる宗教と接触して居た。既に述べたる如く、後期ヒムヤール時代にユダヤ教及びキリスト教がヤマンに弘まり始めた。わけてもユダヤ人は、ローマのためにパレスティナを征服されてから故国を去りて南下し来たり、アラビア人の諸族に定着して農耕並びに商業に従事して居たので、アラビア人はよく彼等の信仰を知つて居た。キリスト教も、メソポタミア及びシリアに建設されたアラビア人の国ヒーラ及びガッサーンに汎く行われた。異端として迫害されたネストリウス派及び単性派は好個の避難処をこの沙漠の間に得た。但しメデイナにはユダヤ人が根強く栄えて居たので、キリスト教は入りにくかった。メッカに於てもクライシュ族は宗教に無頓着なりしため上層階級の間にはキリスト教に心惹かれた者は殆どなかつたが、アビシニア・ヤマン・シリアの諸国より流れ來たつてこの町に落ち着ける下層民の中には、少なからぬキリスト教徒が居た。またキリスト教は、単に都市のみでなく、天幕の民の住む北部・中部・東部アラビアにも入り込んで居た。そはシリアやヒーラから葡萄酒を運び、アラビアの奥地を巡りて諸處の市に露店を張れる酒売りや、彼等が伴い來たれる歌謡者などによつて、バダウイー諸族の間に伝えられた。彼等はその信仰に帰依しようとはしなかつたが、曖昧ながらキリスト教を知つて居た。慄愕なる彼等の眼に、平和を愛するキリスト教信者の温順なる言行が、わけても物珍しく映つた。

またアラビア人は、夙くよりペルシア人と接触して來たので、彼等の信仰や風習を知つて居た。ヒーラには多くのペルシア人が住んで居た。アラビアの東海岸がペルシアの支配の下に立つ

に及んで、この地方にも多くのペルシア人が居住した。前にも述べたる如く、マホメットの少年時代に、ヤマンもまたペルシアのササーン王朝に朝貢するようになつたので、ペルシア人は南部アラビアにも移住するに至つた。

さて古蘭^{コラン}はキリスト教・ユダヤ教・サビ教を、正しき教えとして並称して居る。「（マホメットに下されたる啓示を）信ずる者、キリスト教徒・ユダヤ教徒・サビ教徒も、アルラーハと末日とを信じて正義を行う者には、畏怖なく憂懼なからん」（二ノ六二・五ノ六九）。サビ教が如何なる宗旨なるかに就ては、学者の所見区々にして定説がないが、恐らく東方化されたキリスト教の一種である。多くのアラビア詩篇によれば、マホメット自身も、その敵からサビ教徒と呼ばれて居た。当時のメッカ人は、アラビア在来の宗教に限らず、新しき信仰を抱ける者を、異端邪教の意味でサビ教徒と呼べるものである。謂わゆる「篤信者」も、またかくの如き求道者の一群であつた。「篤信者」は古蘭^{コラン}では眞実の信仰を抱く者を指し、ムスリムと同義に使用されて居るけれど、サビ教徒の場合と同じく、当初は異端者又は背馳者を意味して居た。

さて下の伝説は、当時のアラビアの宗教的動搖を物語るものとして、吾等の注意に値する。マホメットの幼少時代のころ、メッカの或る祭日に当り、四人の同志が眞実の信仰即ち「アブラハムの教え」を求めるために群衆から離れ去つた。四人の名はワラカ、ウバイダラー、ウスマーン、

ザイドと呼ぶ。そしてワラカはキリスト教に帰依し、キリスト教徒及び彼等の經典から多くの智慧を学んだ。ウバイダラーは長い煩悶の後にマホメットの信者となつたが、アビシニアに移つてからキリスト教に帰依し、回教徒に向かつて「吾等は明らかに物を見るのに、彼等は嬰児のように目ばたきして居る」と告げた。ウスマーンはビザンツの宮廷に仕え、キリスト教徒となりて位高き廷臣となつた。ひとりザイドだけは、ユダヤ教徒にもキリスト教徒にもならず、さりとて偶像をも拝せず、偶像に献げられたる肉を食わず、人々に向かつては偶像崇拜の非を鳴らし、方形殿の前では下のようすに禱つて居た。曰く「神よ、吾もし如何なる教えが最も御旨に適うかを知らば、吾はこれを信ぜん。但だこれを知らざるを如何せん」と。叙上四人のうちワラカは、マホメットの妻ハディーヤの従兄であつたと言われる。この伝説は、たとい幾多の粉飾あるにしても、当時のメッカに於ける精神界の一面を反映せるものであり、マホメットの出現が決して偶然ならざりしことを思わしめる。

さて「玄石」を祀るメッカの方形殿は、石を以て神の象徴とするアラビアの神殿のうち、最も神聖なるものとされて居た。ここでは一年の日数に相当する三百六十有余の神々が崇められて居たが、それ等の神々のうちマナート、アル・ラート、アル・ウッザの三神が、格段なる地位を与えられて居た。マナートは、メッカの南方に居住し、好戦にして詩歌を好めるホザイル族のために尊崇せる女神で、運命を司る神であつたらしい。アル・ラートは恐らく母性を神格化せる女神で、この神を祀る最も名高き神殿がタトイフに建てられて居た。アル・ウッザは「偉力者」を意味し、

その本質に於てアル・ラートと同一のものと思われるが、北部アラビアでは金星の神格化、従つて義と愛の女神として崇められて居た。メッカの北方數マイルのナクラに、この女神を祀る名高き神殿があつた。後に述べるようにマホメットは、アルラーハ(アルラーハ：神、神の御名、神の御名の総称、神の御名の総称の総称、神の御名の総称の総称の総称)以前にこれ等の三女神の崇拜を容認して、彼を迫害して止まぬメッカ市民と妥協しようとしたことがある。

かようによアラビア人は、数多の神々を崇拜して居たとは言え、一切の諸神を超越せる偉大なる神アルラーハの存在を信じて居た。それ故にマホメットが「アルラーハの前に神なし」と宣言せる時、彼は決して新しき神を教えたのではない。彼は唯だアルラーハのみが崇拜せらるべき神であり、その他の諸神はこれをアルラーハと同位に置くべからざるもの、即ち崇むべからざるものなることを教えたのである。またアラビア人は決してアルラーハを無視して居たのでもない。アルラーハはアラビア至聖神殿たる方形殿の祭神であり、メッカの繁昌と安泰とを護る神と崇められて居た。それのみならずアラビア語を話すユダヤ教徒及びキリスト教徒は、彼等の神エホヴァをもアルラーハと呼んで居たので、キリスト教徒となれるアラビア人のうちには、キリストの神と「方形殿の主」とを同視して、時にはここで行われる儀式に加わることもあつた。マホメットは、当初恐らく新しい宗教を唱えようとしたのではなく、既に存在せるアルラーハの信仰を純化し、この信仰の真実の意味を顯わそうとしたものである。そしてその精神的価値の深化と信仰の浄化に伴いて、遂にアラビアの宗教と絶縁するに至れるものである。

第二章 マホメットの祖父と父、その青年時代

— マホメットの祖父と両親

クサーアーイーが老後激務に堪えなくなつた時、長子アブドッダール (*Abdūd-Dār*) がその後を嗣ぎ、アブドッダールの死後はそれ等の数々の特權が、彼の諸子並びに諸孫に伝えられた。しかしながら西紀第六世紀初頭に於て、アブドッダールの子孫たちは、これ等の権力を維持するには余りに若年であった。そして彼等に対する最も有力なる競争者は、同じくクサーアーイーの子にしてアブドッダールの弟であるアブド・マナーフ (*Abd Manāf*) であった。このアブド・マナーフの四子アブド・シャムス (*Abd Shams*)、ナウファル (*Naufal*)、ハーシム (*Hāshim*)、アル・ムッタリブ (*Al-Mutallib*) が、その父アブド・マナーフが確立した勢力に拠つて、クサーアーイーからアブドッダールの子孫に

伝えられた世襲の特権を、自分たちの手に奪い取ろうとした。その牛耳を執ったのはハーシムであつたが、アブドッダールの子孫たちは、無論己れの特権をむざむざ他の手に渡そうとはしなかつたので、ここに両家の軋轢を生じた。

クライシュ (Quraish) 族の諸家は、或いはアブド・マナーフ家に味方し、或いはアブドッダール家に加担して両派に分れた。その対立抗争は次第に激化して、危く干戈を交えんばかりになつたが、両者の間に妥協が成立して辛うじて血を見ずにするんだ。即ちハーシム並びにその一党は、巡礼者に食料並びに飲料を供給するという最も利益多い特権を譲られ、アブドッダールの子孫たちは聖殿及び会堂の保護権、及び戦時に於ける軍旗捧持の栄誉を与えられるという条件の下に、多年に亘る確執が一応平和の間に解決を見た。

さてハーシムは莫大なる富を擁して居たが、独り彼のみならずクライシュ族には商業によつて富を積める家が多かつた。ハーシムはそれ等の富になる諸家に呼びかけた——「汝等はアッラーの隣人であり、聖殿の守護者である。聖殿参詣者は取りも直さずアッラーの賓客である。それ故にこれ等は如何なる他の客人にも優りて彼等を好遇しなければならぬ。汝等は特別なる神意によつてこの高貴なる役目に選ばれて居るのだ。それ故にアッラーの賓客を敬い、充分にこれを慰めよ。彼等は遠い町々から、長途の旅に瘠せ衰えた駱駝に跨り、髪を乱し、身に塵を浴び、疲れ果てて汝等の許に来る。それ故に懇ろに彼等を歓待し、存分に水を与えよ」と。

ハーシムは自ら範を垂れて巡礼者を好遇したので、その他の両家もまた彼等の力に応じて巡礼

者を優待した。かようにしてハーシムの名は、優遇されて故郷に帰る参詣者によつて、アラビア半島の隅々にまで伝えられた。ハーシムはまたメッカが甚だしい飢饉に襲われた時、自らシリアに赴いて多量の小麦粉を買い入れ、これを駱駝に積んで持ち帰り、直ちにこれをパンに焼き、その上に駱駝までも屠つてことごとくこれをメッカ市民に分け与えたこともあつた。彼はメッカ市民のために、夏冬二期の隊商派遣制をも確立した。即ち冬季には南方ヤマン及びアビシニアに、夏季には北方シリア方面に、定期の隊商を派遣する制度を定めたのである。

メッカと外国との交渉も、アブド・マナーフの諸子の手によつて行われた。ハーシム自身はローマ帝国並びにガッサーン王国と条約を結び、ローマ皇帝からクライシユ族が安全にシリアに往復し得る許可証を与えられた。アブド・シャムスはアビシニア王国と条約を結びメッカ市民のためにこの国との貿易を容易ならしめた。ナウファルとアル・ムッタリブはペルシア国王と条約を結び、メッカ商人のためにイラク及びファールスとの貿易の途を開き、またヒムヤールの諸君主と条約を結んで、ヤマンとの取引を盛んならしめた。かようにしてクライシユ族は、ハーシムの指導の下に年と共に繁栄に赴いた。

然るにハーシムの功業と声望とは、兄アブド・シャムスの子、即ち彼の甥に当るウマイヤ(Umayya)に激しい嫉妬の情を煽つた。ウマイヤもまた極めて富裕であったので、叔父と声望を競うために頻りに財を散じた。然るにクライシユ族はこの青年の稚氣を笑うのみであつたので、彼は憤激の余りハーシムに向かつて無謀にも「優劣勝負」を挑んだ。優劣勝負とは審判表を定めて

両者の間に才能、勇武、功業、声望等の優劣を定めようとする争いである。ハーシムは年輩も力倆も比較にならぬ若者を相手に勝負を争うことを好まなかつた。彼は敗者は駱駝五十頭を勝者に与えた上、クライシュ族の人々は、ハーシムを辞退させなかつた。彼は敗者は駱駝五十頭を勝者に与えた上、十年間メッカから退去するという条件で、ウマイヤの挑戦に応じた。力競べはクザア（Kuzâa）族の一ト者を審判者として行われたが、もとより勝利はハーシムのものであつた。彼は五十頭の駱駝を受け取り、メッカ郊外の山谷でことごとくこれを屠り、集つて来た市民を饗應した。そして勝負に敗れたウマイヤはメッカを去りてシリアに赴き、十年の追放期間をそこで過した。回教史上に名高きハーシム家とウマイヤ家との対立は、実に端をこの時から発して居る。

さてハーシムが老齢に達してからのこと、商用のために北方に旅し、足をヤスリブ（Yathrib）（後のメディナ）に駐めた。ここでハーリムは、一人の美しい婦人が、下で働いて居る人々に、高台の上から売買の指図をして居る姿に心を惹かれた。この婦人はヤスリブのハズラジ（Khazraj）族のアムル（Amr）という人の女で、サルマ（Sâraha）という名前であった。彼女は一度結婚したが今は独身であり、富と美貌と才能とを兼ね備えて居るので、結婚を申し込む男子が多かつたけれど、甚だ気位が高かつたので決して承諾を与えるなかつた。サルマの素性を確かめたハーシムは、早速彼女に結婚を申し出た。ハーシムの名前は普くアラビアに知られて居たので、サルマは欣んで応じた。そしてハーシムと共にメッカ（Mecca）に赴いたが、彼の胤を宿してからヤスリブに帰つて

一男児を挙げ、そのままこの町に留まつてメッカに還らなかつた。

この事ありて数年之後、ハーシムはガザへの隊商旅行を最後に世を逝つたが、臨終に当つて自分の権利を弟アル・ムッタリブに相続させた。アル・ムッタリブは遺言に従つてハーシムの遺児を引き取るためにヤスリブに赴いた。メッカの人々は、彼が一少年を伴い帰つたのを見て、彼が奴隸を買つて来たものと早合点し、口々に「あれ見よ、アブド・ル・ムッタリブ (Abdu'l-Muttalib) を」と叫んだ。アブド・ル・ムッタリブとは「アル・ムッタリブの僕」という意味である。アル・ムッタリブは人々の早合点をたしなめて「これはハーシムの小供で、私の甥だ」と言つたので人々は詰め寄つてつくづく少年を眺め、「なるほど、この児はハーシムそっくりだ」と感嘆した。この事のためにこの少年はアブド・ル・ムッタリブと呼ばれることになつた。

アブド・ル・ムッタリブは叔父アル・ムッタリブの家で育つたが長ずるに及んで叔父は父の遺産の分け前を彼に与えた。然るに伯父ナウファルは、アブド・ル・ムッタリブの若年なるに乘じて、彼の財産を不法に彼から奪い取つた。成年に達してから、事情を同族に打ち明けて、奪われた権利の回復に助力を求めたが、何人もこれに応じなかつた。そこで彼はこの事をヤスリブの母方の親族に訴えた。母方の縁者八十人が、これを聞くと同時に駱駝に跨つてメディナに疾駆した。彼等を迎えたアブド・ル・ムッタリブは、自分の家に彼等を案内しようとしたが、彼等はナウファルと談判を終えた後でなければ断じて駱背を下りないと答え、直ちに神殿に馳せ向かつた。そしてナウファルがクライシュ族の諸家長たちと共にそこに居るのを見た。ナウファルは

起つて歓迎の挨拶をしたが、彼等の首領はその挨拶を斥け、剣を抜いて「孤児のものを即刻本人に返せ。然らずばこの剣を汝の胸に刺すぞ」と叫んだ。その勢いに怖れてナウファルは彼等の要求に応じ、並々居るクライシュ族の家長たちの前で、必ず約束を履行すると誓言した。

数年の後アル・ムツタリブが死んだ時、彼は巡礼者給食の権利をも叔父から相続した。それでもその頃の彼の勢力は微々たるものであつた。その上彼の手足になつて働く子息は唯だ一人きりであつたので、競争の立場にあるクライシュ族の諸家との争覇は困難であつた。この不遇の間に彼は古のザムザム泉の発見に没頭した。この泉が影を潜めてから、巡礼者への給水は非常に厄介な仕事になつて居たのである。彼はその子アル・ハーリス (al-Hāris) と共に熱心に探索を続けて、終にこの泉を掘り当て、三百年以前にジュルホム (Jūrhum) の君主が埋めたとせられる二個の黄金羚羊像、剣並びに甲冑を発見した。クライシュ族はこの幸運を羨み、宝物の分与を求めたのみならず、ザムザム泉は共同の先祖イシマエルの有だと言つてこの聖泉に対する権利をも主張した。アブド・ル・ムツタリブは彼等の要求を頭から拒絶するほどの勢力は未だ無かつたので、神占によつて事を決することとなり、その結果羚羊像二個は神殿の有となり、剣と甲冑はアブド・ル・ムツタリブに帰し、クライシュ族は聖泉に対する権利を放棄することになつた。

そこでアブド・ル・ムツタリブは両羚羊像を一枚の黄金の板に鑄直し、これを神殿の扉の装飾とした。そして神殿内の宝物の護刀として、剣をその戸の前に懸けた。ザムザム泉が滾々と湧き出すと、市内の井戸の水は皆涸れた。彼はこの泉の水を巡礼者に給した。この時からアブド・ル・

ムッタリブの勢力は頓に昂まつた。かつて彼は家族の無人を嘆き、もし神が十人の男子を授けるならば、必ずその中の一人を犠牲として献げると祈つたが、今や子の数も殖えて、男子の数も十人に達した。この事は彼の勢力を増すことになつたが、同時に心配の種にもなつた。それは彼が一人の男児を人身御供にあげるという神への約束を果さねばならぬことになつたからである。

一日彼は十人の男児を伴つて神殿に往つた。そして神殿で抽籤を行なつた。籤は最年少の、また彼が最愛のアブドッラー (Abd Allah) に当つた。彼の娘たちは十頭の駱駝でアブドッラーの命を贖うよう泣いてその父に願つた。もし神意に適うならばと言って、アブドッラーは更めて抽籤を行つたが、この度もアブドッラーに当つた。かくの如きこと十四回、駱駝の数が百頭に達した時、初めて籤は駱駝に当つた。父は欣んでアブドッラーの生命を助け、百頭の駱駝を神に供えた後、ことごとくこれをサファー、マルワの両丘の間に屠つて市民を饗応した。

かようにしてアブド・ル・ムッタリブの勢力と名声とが年と共に強くかつ高くなつたので、ウマイヤ家の嫉妬を買ひ、ウマイヤの子ハルブ (Harb) がまたまた「力競べ」をアブド・ル・ムッタリブに申し込んだ。^{しかし}而してこの度もまた勝利は彼に帰したので、ウマイヤ家のハーンム家に対する敵意は一層根強きものとなつて來た。^{しかし}而してアブド・ル・ムッタリブが同じくメッカに住めるクザーハ族と同盟を結んだことは、更に彼の地位を強固にした。

西紀五七〇年はアブド・ル・ムッタリブ逝去の八年前に當る。この年ヤマンのアビシニア太守アブラハ (Abraha) が、催してメッカ征服を企てた。彼の率いたる大軍の中に巨象が居たので、こ

の巨大なる動物に驚異せるアラビア人はこの年を「象の年」と名づけた。途上若干の抵抗を苦もなく平げたアブラハの大軍は、メッカを距る三日行程のターリフ(タリフ)に到着した。ターリフは常にメッカの繁栄を嫉んで居たので、ただにアブラハに抗戦せざりしのみならず、案内者を出してその行軍に便利を与えた。アブラハは先ず一隊の兵力を派遣して掠奪を行わしみたが、その中にはアブド・ル・ムッタリブの所有にかかる二百頭の駱駝も含まれて居た。同時に彼は使節をメッカに派し、もし彼等が神殿を破壊しさえすれば、一滴の血をも流さずに軍を回すべきことを提議させた。メッカ市民は武力を以てアブラハ軍に抵抗することの到底不可能なることを知つて居た。しかしながら神殿破壊は絶対に容れられぬ条件である。アブラハの使者は、アブド・ル・ムッタリブ以下数名のメッカ代表者をアブラハの陣営に伴い、彼等をして直接事情を具陳せしめた。この時アブド・ル・ムッタリブは極めて鄭重なる待遇を受けた。アブラハは彼の意を迎えるために掠奪した駱駝を還附した。されど神殿の破壊を承知させることは遂に不可能であった。談判は破裂して、アブド・ル・ムッタリブ以下の一行はメッカに帰った。市民は彼の忠告に従い、予想される攻撃の前日に、一隊となつて市外の山谷の間に逃避する準備を始めた。その時彼は神殿の前で声高く祈つた——「主よ、汝自身の家を護り給え、十字架をして聖殿に勝たしむることなけれ。」祈り終つて一同と共に郊外の丘上に退き、敵の来襲を見守つた。

メッカが恐怖に襲われて居る間にアブラハの軍にも恐るべき事態が発生した。それは恐らく急激なる天然痘の発病である。それが非常なる速度を以て士卒の間に伝染したので、アブラハ軍は

戦意を失つて退却し始めた。而して案内者を失える彼等は、路を山谷の間に失いて、飢餓病氣のため夥しく落命した。加うるに豪雨のため洪水が起り、多くの者が押し流された。アブラハ自身もこの病に犯され、首都サナアに帰ると同時に死んだ。かくて彼の遠征は無残なる失敗に終つた。

この年の春、アブラハ来襲の数月以前にアブド・ル・ムッタリブは今は二十四歳に達した愛子アブドッラーをクサーイーの弟ゾホラ (Zuhra) の後裔なるウハイブ (Uhab) の家に伴い、彼の姪にしてその後見の下にありしアーミナ (Àmina) と結婚させた。同時に彼はその時既に七十歳の老齢なりしに拘らず、自分のためにもウハイブの女にしてアーミナと従姉妹に当るハーラ (Hâla) を妻に迎えた。その勇武の故を以て「アッラーとその使者との獅子」と呼ばれしハムザ (Hamza) は實にこの老後の結婚の果実である。

当時のアラビアの風習に従い、アブドッラーはアーミナの家に三日間逗留した後、新妻を残してガザへの隊商に加わつて出立したが、その帰途メディナで病氣に罹り、父の母方の親戚に病臥することとなつた。この報告を聞いてアブド・ル・ムッタリブはアブドッラーの兄アル・ハーリスをメディナ (Medina) に急派したが、その時彼は既にこの世の人でなかつた。かくてその美貌と善良との故を以て、アーミナを羨んで二百のメッカ美女を悶死せしめたと伝えられるアブドッラーは既にその種を宿せるも未だ分娩せざる美しき妻に、僅かに五頭の駱駝とウムム・アイマン (Umm Aiman) と呼ぶ一人の奴隸とを遺し、二十五歳を以て長逝した。その後いくばくもなくしてアーミナの胎を出た男児が即ちマホメットである。

一一 マホメットの誕生とその幼時

マホメットの出生年月日は巨象の年第三月十二日とされて居る。コーサン・ド・ペルシバル (Caussin de Perceval) はこれを西紀五七〇年八月二十日に当ると算定し、アウグスト・ミュラー (August Müller) もこれに賛成して居るが、パーマー (E. H. Palmer)、イマヌエル・ドイッヂ (Immanuel Deutsch) 及びシュプレンガー (Sprenger) は西紀五七一年四月二十日に当るとして居る。

後代の信者は、奔放なる想像を以てマホメットの誕生を飾った。例えばアーミナは懷胎数月にして少しもその腹起らず、臨月に及んで腹起りても何の苦惱もなく、あたかも飽食した時の如く感じただけであった。そしてその妊娠の間に、幾たびか空中に声ありて「汝の子を當にマホメットと名づくべし」と言うを聞いた。その出産に臨んでは、虚空に妙音あり、これを聴いて初産の心配はたちまち消え、一心唯だ喜ばしく感じて居ると、いずれよりか白鳥が飛来し、翼を以て腹を撫でたので、いささかも陣痛を覚えなかつた。いよいよ分娩の際には、七千の天使、皆な童児の姿を取り手に手に黄金の瓶を捧げ、口に聖徳を頌しながら室外を囲み、堅く惡魔の入り来るを防いだ。その生るるや、三天使來臨し、一は天露を貯えたる黄金の瓶にて嬰兒を洗浴し、一は瓶を易えること七たび、一は光明の巾を以てこれを拭つた。浴し終るや、神鳥飛来し、翼を展べてやや久しくこれを覆い、次いで数個の天使來臨し、薰香を以て五体を拭い、深緑の絹布を身に衣

せた。このタペペルシア国では宮殿がすさまじく震動し、十四の塔が倒潰し、ゾロアスターの神壇に輝き来たれる千年不滅の聖火が消え去つたと伝えられる。

アブド・ル・ムッタリブが神殿の境内でメッカの有力者たち並びにその子息らと何事かを相談して居た時に、男児を安産したという知らせがアーミナから来た。彼は欣然として起上り、そこに集まつて居た人々を引き連れてアーミナの許に往つた。出産の経緯を聞き終ると、彼は自ら嬰児を抱いて神殿に引きかえし、恭しく神に脆いて感謝を献げたる後これにマホメットという名を与えた。

マホメット即ちムハムマッド（Muhammad）という名前はアラビアで絶無ではないにしても希なる名前である。それは「讃美される者」を意味し、同一語根からの「讃美する者」という意味のアハマッド（Ahmad）という名前もあり、両者は殆ど同一のものとされて居る。新約聖書ヨハネ伝第十四章十六節にイエスの言として「われ父に請わん、父は他に助主を与えて永遠に汝等とともに居らしむべし」とあり、同じく第十六章第七節には「わが去るは汝等の益なり、われ去らずば助主汝等に來たらば、我ゆかばこれを汝等に遣わさん」とある。ここに「助主」というはギリシア語の *Paracletos* の訳語であるが、回教の学者は、これを以てアラビア語のアハマッドに当るとなし、イエスは明白にマホメットの出現を予言したのだと強く主張する。そして古蘭コランには下の如く述べられて居る——「マリアの子イエスがかく言える時を念え、『イスラエルの児等よ、げに吾は汝等に遣わされたるアッラーの使者にして、吾以前に与えられたる律法を確認し、吾が後に

来たるべき一人の使者を告知するものなり。その名はアハマッドと呼ばるべし』』（六一ノ六）。これによつて見れば、マホメットが自身もイエスが彼の出現を予言したことを確信して居たのである。これはギリシア語の *Paracletos* を、発音の類似から *Periklytos* と間違えられたものと言われて居る。

さてメッカの上流社会では、生母が嬰児に哺乳せず、乳母にこれを託する風習であったので、マホメットも伯父アブー・ラハブ（*Abū Lahab*）の女奴隸スワイバ（*Thuwāiba*）に預けられた。スワイバにはマスルー（*Masrūh*）という自分の男児があり、後にマホメットの叔父ハムザにも哺乳した。彼女がマホメットに乳を与えたのは僅かに数日の間にすぎなかつたけれど、彼は生涯を通じて深い情愛を彼女に示した。遷都七年彼女が長逝するまで、彼は一年として期節の贈物をこの乳母に欠かしたことがなかつた。

スワイバが乳を与え初めてから十日も経たぬ時、ハワーズイン（*Hawāzin*）族のサアド（*Sād*）族の一群がメッカから來たが、その中に十人の乳母志願者が居た。メッカ市民はその子の健康のため、また純粹なアラビア語を覚えさせたため、沙漠の自由なる気風を習わせるため、附近のバダウイー（遊牧民）にこれを託する風習があつた。ハワーズイン族はメッカとターアイフの間の曠野に牧畜を営む有力なる遊牧民である。マホメットは孤児であるので、サアド族の女子は、多くの報酬を望めないためこれを預かることを嫌つたが、ハリーマ（*Halima*）という女子が漸く納得してマホメットを引き取つた。

サアド族の間にハリーマの乳で育つたマホメットは、二年の後離乳期となつたので、ハリーマはこれをアーミナの許に連れ帰つた。アーミナはマホメットが非常に健康で、年齢の倍ほどにも見える発育ぶりを欣び、是非乳母を続けてこの子を沙漠の中で育ててくれと頼んだので、ハリーマは快く承知して、またマホメットと共に沙漠に帰つた。

然るにその後二年経つてから、マホメットに異常なことが起つたのでハリーマは非常に驚いた。それはマホメットが癩瘍に類した症状を起したことと思われるが、伝承は下の如く伝えて居る。一日マホメットは乳兄弟であるハリーマの子と共に遠く家を離れて遊んで居た。然るにハリーマの子があわただしくその母に走り帰つて、白衣を着た二人の者がクライシュの小供を捉え、これを圧し倒してその胸を切り開いたと告げた。ハリーマ夫婦が驚いて現場に駆けつけると、マホメットは何事もなかつたようにそこに立つて居た。彼等が何事が起つたかと訊ねると、彼は答えた。「二人の者が来て、私を投げ倒して胸を割つて行つた」と。ハリーマの夫は「この児は屹度癩瘍にかかつたのだ」と言つた。そして夫婦相談の上で、マホメットをメッカの母の許に還すことにした。ハリーマはアーミナに向かつて「この児は悪魔に憑かれたのであるう」と告げたが、アーミナは左様なことのある筈はないから、是非養育を続けてくれと頼んだので、心からマホメットを愛して居たハリーマは、遂にその請を容れて復た沙漠に連れ帰つた。古蘭第九四章に「吾は汝の胸を開かざりしか」とある。ここに胸を開くというのは、憂いを去る意味に外ならぬと思われるが、回教徒はこれを文字通りに解釈して、この時両天使が神意を奉じてマホメットの

胸を割き、その臓腑を取りて一切の不淨を滌蕩^{アマツヂ}し、信仰と智慧と純潔と光明とを以て充たしたのだとする。この事があつてから、ハリーマは片時もマホメットから目を放さぬよう気を付けたが、その後一年の後にまた以前のようなことが起つたので、この度は遂に母の許に還すこととした。即ちマホメットが五歳の時である。

この五年に亘る沙漠生活は、マホメットの体格を立派にし、自由にして独立なる精神を植えつけ、わけても彼の言語をアラビア語中の至純のものたらしめた。後年彼は言つた——「げに吾は汝等のうちの最も完全なアラビア人である。吾が血はクライシュ族の血統を引き、吾が言葉はサアド族の言葉である」と。彼は、幼年の間にサアド族の間にハリーマに愛育されたことを終生感謝して居た。マホメットがハディーアジヤ（Khadijah）と結婚してから、ハリーマが彼を訪れた。その年は旱魃で、多くの家畜が落命したので、マホメットはハディーアジヤと相談して、駱駝一頭と羊四十頭をハリーマに与えた。ハリーマが来る毎にマホメットは自分の外套を展べてその上に坐らせた。これは特別なる敬愛の情を示すアラビアの習慣である。そしてその手をハリーマの胸に当てて深い情愛を示すを常とした。後年彼がターアイフを攻めた時、彼はハワーズイン族を討つて多数の俘虜を得たが、彼等はマホメットの幼時のことを告げて容易に釈放された。同じ時にシャイイマー（Shaimā）という女が、他の俘虜と一緒にマホメットの幕営に連れられて來た。剣を以て脅された彼女は「私は予言者の乳兄妹です」と言つた。マホメットは「証拠があるか」と訊ねた。シャイイマーが答えた。「私が貴方をおんぶして居る時に、私の背中に食いつきましたが、その痕

が今でも残つて居ります」と。彼はその傷痕を見て、外套を展べて自分の傍に彼女を坐らせ、もし彼女が欲するならば彼の許に置いて一生安楽に暮らさせてやると言つたが、彼女は多くの贈物を与えられてその家に帰つた。

いま六歳になつたマホメットは、メッカでその母の許に暮すことになつた。アーミナは健かに育つたマホメットを、亡父の母方の親類に見せるため、メディナ行きを思い立つた。そしてマホメットの傳に女奴隸のウムム・アイマンを伴い駱駝に乗つて出立した。メディナに到着すると、亡夫が死去し葬られた家に泊つて約一個月滞在した。この滞在は深い印象をマホメットの脳裡に刻み込んだ。彼は後年しばしばこの間のいろいろの出来事を想起して左右の者に語り聞かせた。四十七年の後、彼がメッカを逃れて初めてメディナに入つた時も、彼は直ちにその家を訪ねた。彼は言つた、「私はこの家でよくウナイサ(Unaisa)という娘と遊んだ。私の従兄弟たちと一緒に鳥を追つたり、家根に登つたりしたものだ。私の母はこの家に泊つて居たのだ。ここに私の父の墓もある。あれ見よ、彼の地で私は初めて泳ぎを覚えたのだ」と。

来る時と同じく母子は帰途についた。然るに半途アル・アブワ（Al-Abwā）という所でアーミナは病氣に罹り、俄かに世を逝つた。孤児はウムム・アイマンに伴わされてメッカに帰つた。そして祖父アブド・ル・ムッタリブの手に委ねられた。ウムム・アイマンは当時は一少女にすぎなかつたが、最も忠実なるマホメットの乳母として、その後も長く彼に事えた。^が後年ホダイビーヤ遠征に際し、アル・アブワに母の墳墓に詣で、声を挙げて泣いたので、左右の人々は驚いてそ

の故を訊した。彼は言った「これは母の墓だ。アッラーの御許しを得て私はこれに詣ったのだ。私の母のために宥恕を祈つたが免されなかつた。それで私は母のことを憶い母が私に優しかつたことを憶つて泣いたのだ」と。

アブド・ル・ムッタリブはこの時既に八十に近い高齢であつたが、特別なる愛情をこの幼い孫に注いだ。その頃メッカでは、神殿の下に毛毯を布き、長老たちは烈日を避けてその上に坐り、毛毯の周囲に若干の間隔を置いて若い者が恭しく坐るを常とした。かような時にマホメットは遠慮なく祖父の毛毯に押しかけてその側に坐つた。若者たちがその無礼を咎めて呼び戻そうとするとき、アブド・ル・ムッタリブは「そのままに、そのままに」と言つて、孫の背中を軽く叩きながら、彼の口から出る無邪気な話を欣んだ。彼にはなお乳母が附き添つて居たが、いつも乳母の手から脱け出しては祖父の部屋に入り込み、祖父が独りで眠つて居る時でも遠慮しなかつた。

しかしこの大切の祖父も二年後に八十歳の高齢で大往生を遂げた。彼は祖父の柩に従い行く時、会葬者の腹を断つほど泣き続けた。この祖父の生活や性格が甚大なる影響をマホメットに与えたことは言うまでもない。而して祖父は臨終に当つてこの孫をアブー・ターリブ (Abū Tālib) に託した。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

三 マホメットの青年時代

アブド・ル・ムッタリブの死によつて、ハーシム家はその柱石を失つた。彼の多数の男児のうち、長男アル・ハーリスは彼に先だつて死し、後に残つた重なる者はアッ・ズバイル (Az-Zubair)、アブー・ターリブ (この二人はマホメットの父アブドッラーと同じ胎から生れた)、アブー・ラハブ、アル・アッバース (Al-Abbas) 及びハムザの五人であつたが、最後の二人はなお少年であつた。アッ・ズバイルは最年長の故を以てアブド・ル・ムッタリブの権利と役目とを相続したが、彼はアブー・ターリブにこれを遺して死んだ。けれどもアブー・ターリブは貧困で、その相続した役目を果たせなかつたので、これを富裕なる弟アル・アッバースに譲つた。けれどアル・アッバースも参詣者に飲料水を給する権利だけを確保して、食糧供給の権利を他に譲らねばならなかつた。彼はザムザム泉の管理を含むこの重要な役目を、マホメットのメッカ征服までハーシム家のために応援しマホメットによつて更めて彼の家の権利と確認されたが、溫柔な性格であつたので、重きをメッカに成さなかつた。アブー・ターリブは極めて高貴な性格の持ち主でその為に人々に尊敬されはしたが、恐らく貧困のために表面に立つことはなかつた。かくてハーシム家のメッカに於ける勢力は、アブド・ル・ムッタリブの死後頓に傾き初め、これに代つてウマイヤ家が次第に擡頭して來た。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

但しアブー・ターリブはアブド・ル・ムッタリブと同様に、マホメットを熱愛した。寝る時も食事の時も常に側を離さず、外出の時にも常に彼を伴った。幼くして母を失い、祖父を失ったことは、彼のために大なる不幸であったが、この篤実廉潔なる伯父の濃かな愛情に浴しながらその少年時代を送ったことは、彼にとりて大なる幸福であった。彼が十二歳の時、アブー・ターリブは隊商を組んでシリアに往ったが、その時も彼を同伴した。初めは彼をメッカに留め置くつもりであつたが、出発の準備既に整い、アブー・ターリブが将に駱駝に乗ろうとした時、彼が「伯父一たび去らば誰が吾を顧るものぞ」と悲嘆したので、優しき伯父は急に彼を伴い行くことにしたのである。

数ヶ月に亘るこの長途の旅行が、マホメットの心中に如何に多くの糧を与えたかは想像するに難くない。同行の人々は途々多くのことを彼に語り聞かせたであろう。シリアのボスラに到り着くまでは、古に栄えて今は廢墟となれる町々を通った。アル・ヒジル (Al-Hijr) の山谷を通りては昔サムード (Samud) の民が岩山を研ぎつけて造った家々の跡を見たであろう。予言者サーリ (Sâlih) が岩の中から駱駝を出現させて神威を示したのに、その神駄を屠つた為に恐ろしい天譴が降つてサムードの民が全滅したという物語もその現場で聞いたであろう。他の町では神の掟を破つた為に人間が猿になつたという物語も聞いたであろう。

またこの往復に多くのユダヤ人部落を過ぎ、キリスト教徒を多く見聞した。これまでもメッカでマホメットはキリスト教徒を知つて居たが、キリスト教を基礎とした国民的・社会的風習を見

たのは今度が最初であり、教会や礼拝を見たのも今度が最初であり、この宗教の相違も彼の心に深い感銘を与えたに相違ない。

さて毎年のメッカ参詣に先だちてズ・ル・カアダ (Zu'l-Qadā) 聖月 (アラビア大陰暦第十一月) にウカーナ (Ukāz) に行われた市が、マホメットにいろいろなことを教えたに相違ない。ウカーナはメッカから三日行程、井泉湧き椰子樹繁る爽やかな高原にあり、アラビア諸族が四方より雲集して盛大なる市を開き、盛んに物々交換を行い、各種の競技を行い、また諸族の詩人がその作品を披露した。この歌競べで選に入った詩歌は、黄金の文字で書かれてメッカ神殿に掲げられた。この栄冠を得た詩人は、独り自らが最大の名譽を荷えるのみならず、その詩人を出だせる部族の最大の誇りであった。されば単に詩歌に於てのみならず、有力なる諸部族は総ての競技に於て他を圧倒せんと努めた。この激しい競争意識が、遂に西紀五八〇年から四年の長きに亘る所謂瀆神戦争を生むに至つた。瀆神というものはウカーナの市が開かれて居たズ・ル・カアダ月、即ち一切の流血が堅く禁じられて居た聖月に両軍が干戈を交えたからである。

事は西紀五八〇年のウカーナの市で、クライシュ族の一詩人が余りに己の部族の優越を高調したもので、憤慨したハワードイン族の一人が彼を殴打したことから始まつた。するとクライシュ族の若者等が、ハワードイン族の女子に乱暴を働いた。仲裁に立つた者が叩き出された。その都度刀の鞘は払われて血を見たが、双方の長老が宥めて漸く大事に至らずにすんだ。そこで過ちのないよう、市に来る人々は一時武器をメディナの一首長アブドゥラ・イブン・ジュダーン (Abdullah

(ibn Judān) に預けることにした。しかし両者の感情は依然として対立して居た。そしてヒーラ (Al-Hīrā) の君主が香料と麝香とを満載した隊商をハワーズィン族の一首長に托してウカーズの市に送る途中クライシュ族と相結んで居た他の一首長がこれを道に襲うてその首長を殺し、荷物を奪つて逃走した。その途中一クライシュ族に会い、彼と同盟を結んで居るハルブその他のメッカ長老たちに、この事を知らすためにウカーズに走らしめた。このハルブはウマイヤの子で、後にマホメットの恐敵となれるアブー・スフィヤーン (Abū Sufyān) の父である。この報道を得るや、アブドッラー・イブン・ジュダーンは、急用が出来たからと言つて預つて居た武器を総て返却し、メッカの人々を率いて逸早くウカーズを引き上げた。間もなくこの事がハワーズィン族にも知れたので、首長等は直ちに兵を催してメッカ人の後を追うたが、彼等が追いつかぬ前にメッカ市民は禁地に逃げ入つた。そこでハワーズィン族はクライシュ族に向かつて明年のこの季節を期して勝負を決せんと挑み、クライシュ族がこれに応じた。かくして両者の間に不斷に小衝突が繰り返された。四年の後漸く戦い疲れて休戦条約が結ばれた。この戦争にはクライシュ族の各家が、皆その家長に率いられて出征したが、全体の司令官はアブドッラー・イブン・ジュダーンであり、ウマイヤ家はハルブを隊長として最も重要な役目を勤めた。ハーシム家を指揮したのはアッ・ズバイルで、マホメットもその伯父たちと一緒に出陣した。但し彼は戦争には大なる興味を有^もたなかつたらしく思われる。

恐らくマホメットは干戈を執つて戦う戦争よりも、毎年ウカーズに行われた言葉を以て戦う詩

歌雄弁の戦争に一層大なる興味を感じたことと思われる。あらゆる意味に於てウカーズの市は彼にとりて極めて大切な学校であった。彼はここでアラビアの奔放と激情との詩歌や弁論に接すると共に、キリスト教やユダヤ人とも接触した。翌年の市で、彼はナジラーン (Nazrān) の司教コス・イブン・サアイダ (Qoss ibn Saïda) の説教を聴いて痛くその心を動かされたと伝えられて居る。キリスト教徒とユダヤ人とは互いに激しく反目して居たが、両者とも天啓の上に立てられた宗教で、アラビア人の多神教とは全く面目を異にすることも、深く彼を反省せしめたであろう。

後年マホメットがメディナに遷つてからのことである。二、三の信者と街頭で話して居る時、野苺を背負つて行く者が通つた。「あの苺の真黒いやつを一擗み貰つておいで。私がメッカ郊外のアジャードで牧夫をやつて居たころ、よく摘み取つたのがまさしくこの苺だ。予言者に擧げられた者で、牧夫の仕事をやらなかつた者は一人もない」と彼が言つた。この言葉の通り彼はその青年時代に貧しき伯父の生計を授けるために富家に雇われて牧夫となつて居た。而してアラビアの曠野に於ける牧夫としての生活が、彼の性格の上に大なる影響を与えて居ることは明白である。

伝承はかく伝える。或る日の夕方、マホメットは彼と共に羊を牧して居た少年に向かつて言つた。「若い者が娯しむように、私も今晚はメッカに行つて遊んで来る。その間君は私の羊の番をして居てくれ」と。メッカの町の入口で、彼は婚礼の宴会が行われているのに遭つた。物珍らしさに見とれて居るうちに、いつしか眠りに落ちて、覚むれば既に夜が明けて居た。それから間も

なく彼は再びメックカの町に向かった。この度は町の入口で微妙なる音楽を耳にした。これに聴きたれて居るうちに、またもや深い眠りに落ちた。彼はそれっきり誘惑から遠ざかった。伝承はこの話がマホメット自身の口から語られたとして居る。果してこの通りの事実が有つたか無かつたかは別として、マホメットが品行方正な青年であつたろうことは容易に想像される。

四 ハディージャとの多幸なる夫婦生活

いまマホメットは二十五歳に達した。彼は立派に成人した。丈は常人よりもやや高く、肩巾広く胸は厚い。瘠せぎすではあるが、態度には威厳と品格とが具わって来た。隆い鼻、長いまつげと真黒の瞳とをもてる美しい眼、無邪氣でしかも凜々しい顔立、紅らんで健康な血色、どこから見ても立派な男子となつた。いつも思慮深い面持ちで、決して無用の口を利かず、言う時は簡潔で含蓄ある言葉で言つた。稀には雄弁にもなり、口を開いて呵々大笑することもあつたが、大抵は他人の話の聞き手であった。歩く時は少し俯き向き加減で、足取りは山を降る人の如く、速歩でかつ力が入つて居た。物を見る時には決して首だけを傾けず、からだ全体をその方に向けた。無口で控え目にはして居ても、その気品の高い風采と態度が人目を惹いた。そしてその誠実の故を以て「律義者アル・アミーン (Al-Amīn)」と呼ばれた。

或る日アブー・ターリブがこの立派に育つた甥に言つた。「マホメットよ。汝も知つて居る通

り私は貧乏人だ。わけてもこの頃の時節はせち辛い。そこで汝に相談したいことがある。吾々と縁続きのホワイリド (Khawalid) の娘のハディージヤが、シリア行きの隊商を仕立てて、同族のうちから適当な管理人を探して居る。もし汝が往てくれるならハディージヤは二つ返事で承知するが」と。マホメットは即座に快諾したので、アブー・ターリブは早速ハディージヤの家に往き、報酬は駱駝四頭ということにして直ぐ話を纏めた。

マホメットはハディージヤの家人のマイサラ (Maisara) と一緒にシリア隊商の旅に就き、十三年以前伯父に伴われた時と同じ路を辿って無事ボスラに着いた。狡猾なシリア商人相手の取引は商売に初心のマホメットには決して容易なことではなかつたろうと思われるが、彼の聰明と誠実とのお蔭で、例年よりも遙かに有利な取引をすまし、返りの何物を積んで帰途につくことが出来た。

伝承は語る。マホメットのボスラ滞在中にネストリウス (Nestorius) というキリスト教の修道士が、一樹下に坐つて居たマホメットを見るや、「この樹の下は予言者でなければ誰も坐らぬ樹の下です。貴方こそ約束された予言者です」と叫んで彼に抱きついたと。この伝承の真偽はとにかく、マホメットがこの度の旅行中にキリスト教について大なる注意を払い、多くのことをキリスト教徒から学んだに相違ない。但し当時シリアに行われて居たキリスト教は、多分に無用なる附加物によつてその純潔を汚されて居たので、十分なる満足を彼に与え得なかつたと思われる。もしこの時純一なるイエスの信仰をマホメットに教えたキリスト教徒があつたなら、或いはミュニアが想像する如く、彼をしてキリスト教の信仰に入らしめたかも知れない。(Sir William Muir :

Life of Mohammad, Ed. by T. H. Weir, p. 22)

やでハディージャの家人マイサラは、今度の旅行をマホメットと共にし、いたくその誠実にして高貴な人柄に感心した。それで隊商がメッカに近づくと、彼はマホメットに向かって「一足先に駆けて往つて、貴方の口から今度の上首尾を女主人に申し上げなさい」と勧めた。隊商帰着の日取りは判つて居たので、この日ハディージャは多くの侍女に取り巻かれ、階上の見晴しに登つて隊商の帰着を今か今かと待つて居た。しかも見よ、遙か彼方から駱駝に鞭打つて駆け来る者がある。そしてその上には二天使が翼を拡げて焦あわくが如きアラビアの烈日をその騎手のために遮つて居る。近づいて見ればその騎手は外ならぬマホメットであった。彼女がマホメットの報告を聞いて非常に欣んだことは言うまでもない。しかも商売の上首尾よりも一層彼女を欣ばせたのはマホメットの人柄であった。彼女はこの時年は既に四十、いまは寡婦であるけれど、二度結婚して二男一女の母であったが、一挙にしてその魂をマホメットに奪われてしまつた。

ハディージャの父ホワイリドはアサドの孫、アサドはクサーリーの孫である。ホワイリド及び彼の甥ウスマーン（Usmān）は、共にクライシ族の一隊を率いて瀆神戦争に出征して武名を挙げ、メッカの有力者の一人であった。そしてハディージャは容貌も立派であり、家柄は高く、その上富裕であったのでまさしくメッカ第一流の婦人であった。かように外面的条件が三拍子揃つている上に、思慮分別に富み品行が正しくかつ濃かな情愛を備えて居た。従つて富んで地位あるメッカ上流社会に、彼女に求婚する者が多かつたが、彼女は「とく」とこれを斥けて独身者の自

由と独立とを挙んで来た。そのハディージャが年は十五も若く、富も地位もないマホメットに全心全靈の恋を感じたのである。

マイサラの口からマホメットの言行を仔細に語られて、ハディージャの思いは更に募ったに相違ない。遂に彼女は意を決してマホメットの意中を探ることにした。ハディージャの妹がマホメットを訪ねて行つた。そして何故彼が三十五にもなつて結婚せぬかと問うた。「結婚したくて私は何の財産もない。」「財産なぞ無くとも宜かつたらどうです。もし家柄も高く、お金持ちで美人の方が貴方と一緒にになりたいという人があつたらどうしますか。」「そんな人があるものだらうか。」「ありますとも。」「それは誰だ。」「ハディージャです。」「けれどどうして私からそんな話が出来ようか。」「それは私に任せなさい。貴方の意向を承りとうございます。」「承諾します。」妹は帰つてこの旨をハディージャに伝えた。ハディージャは父の反対を恐れ、結婚式を挙げた後にこれを知らせた。果してホワイリドは激怒した。殆ど血を見るまでの騒ぎになつたが、父も漸く得心した。

この結婚はマホメットのためにも、ハディージャのためにも、実に多幸であった。マホメットはこれによつて最も聰明にして忠実貞節なる生涯の伴侣を得た。そしてハディージャもマホメットの高貴なる性格を十分に認識して、最も深き尊敬と最も濃かな愛情とを彼に注いだ。マホメットはハディージャの家に移り住んだが、彼女は独身時代と同様に商売を続け、マホメットにその欲することに身を委ねる余裕を与えた。平和な幸福な生活が永く続いた。長男はアル・カースイ

SAMPLE
Shosei-Shinsui.com

ム (Al-Qāsim) と名づけられ、マホメットはアラビアの習慣に従つてアブー・ル・カースイム (Abūl-Qāsim) と呼ばれることになった。しかしこの児は不幸にして二歳の時に夭逝した。次いでザイナブ (Zainab)、ルカイヤ (Ruqayya)、ファーティマ (Fātima)、ウムム・クルスウム (Umm Khulṣim) の四女相次いで生まれ、最後に男児を生んだがこれは生後間もなく死んだ。ハディーゼヤは男児が生れる毎に二頭の犢こうじ、女兒の時には一頭の犢を神に供えた。そして総ての小供を皆自分で哺育した。この時代はマホメットの生涯のうち最も平安な時代で、後年彼はしばしばこの頃の樂しかりし日常を追憶して居る。そして余りにハディーゼヤを追憶するので、若き妻アーライシャ (Āishah) は、現に一緒に住むマホメットの諸妻の誰に対しても、一度も見たことのない死んだハディーゼヤに最も激しい嫉妬を燃やした。

さてマホメットが三十五歳の時、豪雨のためにメッカの町が洪水に襲われ、神殿も少なからず被害した。壁は亀裂を生じて落ちそうになつた。屋根がないので宝物の保存も不安であり、現に壁を乗り越えて宝物の一部を盗み去つた者もあつた。そこで将来の洪水に備えるため、壁を改造してもっと高くし、かつ屋根をかけることになつた。丁度この時ギリシアの船が一隻難破してメッカより程遠からぬ海岸に吹き寄せられた。そこでクライシュ族の長老アル・ワリード (Al-Walid) が、一群の人々と現地に赴いて、難破した船の材木を買い取り、幸いバーカーム (Bāqūm) というギリシア人の船長が建築の心得があるので、これをも雇い入れて方殿改築に着手することになった。クライシュ族の諸家が四組に分かたれ、各組が四方の石壁の一つを受け持つこと

になつた。

方殿は神聖極まるものとされて居たので、これを破壊すれば神罰が降りはせぬかと皆心配した。然し破壊しなければ改造が出来ないので、アル・ワリードが熱心に災難よけの祈禱を獻げた後、思い切つて鶴嘴で壁の一角を毀した。そして一同は一旦家に帰り、戦々兢々として翌朝まで神罰の有無を待つた。何事も起らなかつたので、改造は熱心に始められた。四方の石壁を取り毀つた上で、深く土を掘り下げ、青緑色の堅い石盤に達して止めた。そこから石を積み上げた。その石は郊外の山から研り出した灰白色の花崗岩で、メッカ市民が拳つてこれを運んだ。

かようにして仕事は順調に運び、石壁の高さも四、五尺に達した。そして名高い「玄石、アル・ハジャル・ル・アスワド (Al-Hajar al-Aswad)」を参詣者が立つて接吻し得る東壁の一角に填める段になつた。この石は、アダムが天上の楽園から堕落した時一緒に地上に落ちたもので、もとは純白であったのが、数知れぬ参詣者の唇や手に触れたため、また衆生の罪惡に涙を流したため、今は黒褐色となり、名も「玄石」と呼ばれて居る。この神聖至極の石を壁上に填め込むことは、言うまでもなくこの上なき名誉の仕事であるので、この時まで仲よく協力して來たクライシュ族がたちまち互いに権利を主張して激しい争論を始めた。そのため仕事も四、五日休んでいざこざを続けたが、何とか話し合いの上で結着をつけようというので、神殿に集つて相談を開いた。その時最年長のクライシュ族が起ち上つてこう言つた。「皆私の言うことを聴いてくれ。私の意見はこうだ。向こうのシャイバ門から一番先に神殿に入つて来る者に、私共の争論にけりをつけさせ

るか、又はその人間にこの大事な仕事をやらせるというのだ。」この提議は一同の賛成を得た。そして最初に門を入り来る者は誰だろうと、皆その方を向いて待つて居た。その時に例の足取りで大地を堅く踏みしめながら門を入つて来たのは、実にマホメットその人であった。これを見て一同は叫んだ。「やあ律義者が来たぞ。彼ならば吾々は不服を唱えまいぞ。」人々から事情を聴き終るとマホメットは着て居たマントを脱いだ。それを上に広げてその上に玄石をのせた。「さあ四組から一人ずつ出て来て、このマントを持ち上げなさい。」それが適當の高さに来るとマホメットは自ら玄石を取つてこれを壁にはめた。一同はマホメットの知慧と審判とに感心した。それから工事は何の故障なく進捗して目出たく竣工した。

この事は当時メッカにクサーアー、ハーリム、アブド・ル・ムッタリブに比すべき指導者がなかつたこと、即ち政治的権力の中心がなかつたことを物語る。事実当時のメッカにはメッカ全体に号令する抜群の人物が居なかつた。マホメットが玄石安置の名誉の仕事を荷なつたことはいろいろな感想を彼の心中に惹起させたことであろう。

神殿再建竣工後、マホメットは伯父アブー・ターリブの幼児アリー（アリ）を養子とした。その経緯はこうである。この年メッカは非常な旱魃であつたので、さなきだに裕福でないアブー・ターリブの生計は一層困難になつた。そこでマホメットは伯父の負担を軽くしていささかでも生活を楽にするために、いま一人の富裕な伯父はアル・アッバースに往つて、アブー・ターリブの小供をお互いに一人ずつ引き取らうと相談した。アル・アッバースがこれに賛成したので、

兩人打ち連れてアブー・ターリブを訪い、この事を申し入れると、アブー・ターリブは「アキール（Akīl）とターリブ（Tālib）の外はどれでも好きなのを」と答えたので、マホメットはアリーをアル・アッバースはジャアフアル（Ja'far）を養子にした。アリーはこの時五歳か六歳の幼年であったが、互いに実際の父子のように相愛した。

この頃にマホメットはザイド・イブン・ハーリサ（Zaid ibn Haritha）をも養子とした。ザイドの父母はキリスト教を奉じた南シリアのウズラ（Uzra）族であったが、幼年の頃掠奪団の手に落ちて奴隸に売られ、青年のころホワイリドの孫、即ちハディージャの甥ハイーム・イブン・ヒザーマ（Hakim ibn Hizāma）に買われたが、ハディージャがマホメットと結婚して間もなきころ、これを叔母に献上した。その時ザイドは二十歳だったと言われるからマホメットよりも五歳年少である。小柄で色は黒く、低い鼻をして居たと言われる。彼は極めて忠実に立ち働いたのでマホメットは強い愛情を彼に示した。これを見てハディージャはザイドをマホメットに贈った。然るに彼の部族の者がメッカ参詣に来た時、ザイドを認めて帰来しこれをその父に知らせた。十数年来一度もザイドを忘れなかつた父は、メッカに飛んで来て、莫大の身代金を彼のために差し出した。マホメットはザイドを呼んで、その去就を任せた。ザイドは去ることを欲しなかつた。「私は貴方の許に残りとう存じます。貴方は私の父でもあります。」この真実の情愛に動かされたマホメットは、直ちにザイド父子を神殿に伴い、群がるメッカ市民の前に「ザイドは吾が子なり」と宣言した。彼の父ハーリサ（Haritha）もこれを聞いて欣んで帰国した。彼は今や自由民となり、

ザイド・イブン・マホメット（マホメットの息子のザイド）と呼ばれることとなつた。マホメットは他年彼に事えた老嫗ウムム・アイマンを彼に娶わせた。ウムム・アイマンはザイドの倍の年齢であったが、ウスマ（Usama）という男児を彼のために挙げた。後にマホメットが瀕死の病床にありし時ムーダ（Mūda）に戦死せるザイドの雪辱戦としてシリア遠征軍を起すに当り、年少のウスマを抜擢してその司令官とした。但しウムム・アイマンが余りに年上なので、マホメットもザイドに気の毒であつたと見え、伝承によれば「この結婚のために汝は必ず楽園に入る」と約束した。

SAMPLE
Shoshi-Shinsui.com

第三章 宗教、社会改革運動の開始

一 将に妥協せんとしたマホメット

或る日メッカの重立つた人達が、神殿の境内に集まつて、いつもの如く町のいろいろな事について相談して居た。その時マホメットが彼等の前に来て、親しげにその側に坐り、古蘭の第五十
三章を誦し始めた。

落つる星によつて誓う。

汝等の伴侣は謬ることなく迷うことなし。

彼の言は私心より出づるに非ず。

そは彼に降されたる啓示にして

四

偉力をえたる者が彼に教えたるなり。

五

そは明智ある者にして、その時至高の天際にありて姿を現したり。

六

次で彼は次第に近づきて天涯より降下し

七

隔ること僅かに両弓乃至それより近き処に達し

八

その僕に対して天啓を默示したり。

九

彼の心はその見るところを謬らざるなり。

一〇

然るに汝等なお彼の見たるものについて彼と争わんとするか。

一一

而して彼は更に一たび彼を見たり。

一二

そは境を劃するスイドラ樹の畔

三四

永住の楽園に近き処に於てなり。

四五

スイドラ樹がこれを覆えるものによつて覆われし時

五六

彼の目は側視せずまた妄視せざりき。

七八

彼は実にその主の休徵の至大なる一つを見たるなり。

八九

汝等はアル・ラート、アル・ウッザル

一〇

並びに第三にはマナートを念えるか。

一一

彼等は天翔ける鶴なり。

一二

彼等の勧解こそげに望ましけれ。

一二

SAMPLE
Shoshi-Shinsu.com

クライシュ族はこれを聞いて驚喜した。それはマホメットが彼等の拝する神々を承認したからである。彼等は欣んでマホメットの朗誦に耳を傾けた。彼の朗誦は下の数節を以て終つた――

近づく日は近づけり。

五七

而してアッラー (Allah) に非ずば何者もこれを示すを得ず。

五八

汝等はこの言に驚くか。

五九

汝等は笑いて泣かざるか。

六〇

汝等は嬉戯するか。

六一

さらばアッラーに叩首してこれに事えよ。

六二

朗誦が終ると一同は申し合せたように地に俯して叩首した。アル・ワリードだけは老齢のため体を曲げることが出来ないので、一握の砂を取つて額にこすり、そして叩首の礼に代えた。そして彼等は言つた。「なるほど生死を掌り、万物を創造し、これを護持する者はアッラーだけであることは良く解つた。ところで吾々の拝する女神たちは、吾々のためアッラーに勧解をして下さるのだ。足下がこれ等の神々を認めてくれたからには、吾々も足下に従おう」と。この言葉を聞いてマホメットは不安の感を抱いて家に帰つた。その後ガブリエルがまた彼に現れたのでマホメットは彼にこの章を復誦した。するとガブリエルは厳然として告げた。「汝が言つたこの言は何事だ。汝は予が決して汝に告げなかつたことを人々の前で言つたのだ」と。マホメットは痛く恐懼して神怒を畏れたが、アッラーは、それは悪魔が汝を誘惑したのだと言つて慰め、先の二十

一、二十二両節を撤回して次の如く啓示した――

汝等はアル・ラート、アル・ウッザル

第三はマナートを念えるか。――

汝等は男児を有してアッラーは女児を有すと言ふか。――

そは不公平なる分配なり。――

これ等は空しき名なり、汝等並びに汝等の祖先がかく名づけたるのみ。アッラーは彼等のために如何なる権威をも降さず。

单なる忖度なり。彼等は唯だその好むところに従うのみ。然るにいまその主よりの嚮導が彼等に来たれるなり。――

されどマホメットがかくの如く訂正する以前にメッカ神殿の境内でクライシユ族を喜ばした両節は、最早総てのメッカ市民の口に上つて居た。従つて彼が啓示を変更したということは甚だしく彼等を憤激させた。

伝説が「その夜」というのは恐らく事実であるまい。マホメットは、在来の宗教と自己の信仰との間に何等かの妥協を認め、これによつてメッカの市民を導こうと考えて居たに相違ない。それが例の啓示となつて現れ、一応妥協が成つたものと思われる。しかも幾くもなくマホメットは、メッカ市民がたといアッラーを認めたとは言え、依然として他の神々を拝してアッラーに見えないのを見た。アッラーの存在は昔からアラビア人が信仰して居たので、彼等がこれを直ち

に承認せることに何の不思議もない。唯だ一切の他の神々の上に、一層正しくは一切の他の神々を棄ててアッラーのみ事えよというのがマホメットの教であるのに、メッカ市民は従前の如く他の神々を拝し続ける。かくてマホメットは自分の非を悟って彼等の神々を「空しき名」なりとした。しかし「あれはサタンの囁きだ」と言つても、不信者は容易に同様な弁解を信ずるものではない。仮にそれが本当だとしても、サタンに誘惑されるような予言者を信じてよいか。彼等は敵意を烈しくすると同時にマホメットを嘲つた。古蘭の下の諸節はこの間の消息を物語る——
彼等の汝を見るや唯だ汝を嘲笑するのみ。曰く「アッラーが使者として挙げたるはこの者なるか。四二もし吾等が堅く護持せざりせば、彼は殆ど吾等の神々を棄てしめたり。四三」（二五章）
この後彼は妥協の誘惑に十分要慎した——

げに彼等は殆ど汝を誘惑し去りて、吾が默示せることに背かしめ、吾に別個の事を捏造せしめんとせり。然りとすれば彼等は友人として汝を遇せるなるべし。七〇七三

吾もし汝を毅然たらしめざりせば、汝は殆ど彼等に傾かんとせるなり。七四

然りとすれば吾は生の懲罰と死の懲罰とを汝に味わわしむべく、かつ汝は吾に對して如何なる佑助者もなかりしなり。

しかもマホメットとメッカ市民との妥協は逸早くアビシニアに伝わり、この地に避難せる信者等は、出立後三箇月を経ざるに、メッカ市民は皆マホメットに帰依せるものと信じて帰国した。然るに妥協はこの時既に破れて居た。その上避難者等がアビシニアで好遇されたことを聞いて、

クライシュ族はいよいよ反感を昂め、迫害の手を強くした。

そこでマホメットは再び信者等にアビシニア避難を勧めた。この度の避難者の第一団は開教第六年に出立したが、この後彼等の後を追う者相次ぎ、幼少児を除いてその数は百一人を算するに至った。そのうち八十三人は男子であつた。これ等のうち男子三十三人、女子八人（ウスマーン及びマホメットの女にしてその妻なりしルカイヤも）はメッカに帰り、後にメディナに移住することになった。その他の信者は長くアラビアに駐まり、遷都七年ハイバル（Khaibar）遠征に及んで初めて帰国した。

さてマホメットに対する迫害は次第に烈しくなつた。メッカの有力者は一日打ち揃つてアブー・ターリブを訪れ、強硬に下のことを申し入れた。「貴方の甥御は、吾々の神々や教えについて勿体ないことを言い、吾々を馬鹿者と罵り、吾々の先祖たちは皆迷つて居たのだと申して居る。これは是非とも貴方の適当な処置を講じて貰わねばならぬ。さもなければ彼を吾々に委して下さい。されば吾々の手で存分の事をします」と。

アブー・ターリブは鄭重に彼等に応答し、「御話の筋を承り置く」と言つて彼等を帰らせた。しかし時経てもマホメットの態度は依然改まらないので、彼等は再びアブー・ターリブに押しかけ、この前の申し入れはどうなつたかと意気込み、最後にこう言い加えた。

「もう吾々はマホメットが、吾々や、吾々の先祖や、吾々の神々に悪態つくことに辛抱出来ませぬ。堪忍袋の緒は切れました。吾々は貴下に貴下の甥の口を閉じさせるように御願いした。貴

方はそれを行ひませぬ。吾々は貴方の年齢を尊び、貴方の立派な人柄や、貴方の地位を重んずる。けれども物には限度がある。もしマホメットの言行が改まらなければ、吾々は貴方に向かって、またマホメットに向かつて武器を執る。吾々の味方も貴方の味方も、一人残らず命を落とすまで戦いましょう」と。

彼等はかく言い捨てて立ち去つた。アブー・ターリブはマホメットを呼んでクライシュ族の言つたことを話し、「だから私も汝も助かるようになさい。背負い切れぬ重荷を私に負わしてくれるな」と。

マホメットは、武力で戦つては叶わぬため、伯父も彼を見棄てたものと想つた。彼は事の容易ならざるに驚きかつ悲しがる。その決心は微動だもしなかつた。「たとい彼等が私の右手に太陽を、左手に月を与えて、私の仕事をやめさせようとしても、私は断じて伝道を止めませぬ。」

それでも最も親愛なる伯父からまでも見放されたかと思えば、涙滂沱として双頬に伝わり、悄然として立ち去ろうとした。その姿を眺めてアブー・ターリブは言つた。

「兄弟の子よ、待て。安心して帰るがよいぞ。言いたいことを言うがよい。誓つて私は汝を棄てないぞ」と。マホメットは万謝して帰つて行つた。

然るにその日何処にもマホメットの姿が見えないと言うので、アブー・ターリブはマホメットが短気なことを仕出来しはせぬかと心配し、ハーシム家の若者どもを召集し、手に手に短剣を握つて神殿に押しかけた。途中でアッ・サファー (Assafā) の家に居ることを聞いて引き返したが、

翌朝再び若者を召集し、マホメットを同伴して、彼等を引率して神殿に赴き、集まつて居たクライシユ族に対し声高く言つた。「神かけて言う。もし汝等が彼を殺すならば汝等のうち一人も生命を全うし得る者はないぞ。汝等が死に絶えるか、それとも吾々が一人残らず死ぬだけだ」と。

このアブー・ターリブの決死の態度がクライシユ族を威圧した。

開教第六年には叙上のようにクライシユ族の敵意が昂まつたが、マホメットは極めて有力なる二人の信者を得た。即ちハムザ (Hamza) とウマル (Umar) である。この兩人はどうして帰信するようになつたか。

或る日マホメットはアッ・サファーの丘に坐つて居ると、アブー・ジャ哈尔 (Abū Jahl) が通り合せて、散々悪口を浴びせかけたが、彼は黙々として答えなかつた。やがて兩人はその場を立ち去つたが、一人の女奴隸がこの経緯を見聞して、深くマホメットに同情して居た。丁度その時に狩獵の名人と知られたハムザが弓を肩にして狩からの帰途通りかかつたので、女奴隸は事の次第をハムザに語つた。ハムザはマホメットの叔父ではあるが、年齢は余り違わず、同じくスワイバに哺れた乳兄弟であり、後年「回教の獅子」と呼ばれた勇猛果敢の人であつたから、この話を聞いて甚しくアブー・ジャ哈尔の無礼を憤慨した。彼は急いで神殿に駆けつけ、そこにアブー・ジャハルが仲間と一緒に居るのを見た。ハムザはつかつかと彼の前に出て言つた。

「おお、君はマホメットを口汚く罵つたそつだが、私も彼の信者だぞ。」そう言つて弓で烈しくアブー・ジャハルを殴り、「さあ、勇氣があるならおが対つて來い」と叫んだ。

アブー・ジャハルの同族は一斉に起ち上つて彼を助けようとしたが、彼はこれを差し止めて言つた。「私に委してくれ。全く私は彼の甥を散々に辱しめたのだ。」やがてハムザはアル・アルカム (Al-Arqam) の家でマホメットに帰信を誓うことになった。

ウマルの帰信はその後間もなく行われた。もと彼は最も烈しい回教の反対者で、信者を迫害し虐待することを知られて居た。彼の妹ファーティマとその夫は信者となつて居たが、クライシユ族を恐れて秘密にして居た。或る日ウマルが信者を責めて居ると、一人の友人が彼に向かつて、掃除なら先ず自分の家から始めたが宜かろうと言つて、ファーティマ夫婦の信心を仄めかした。彼はこれを聞いて大いに怒り、家に帰つて往つた。丁度その時ファーティマ夫婦は、同信の奴隸ハッバーブ (Khabbab) が筆写から朗誦する古蘭第二十章を聴聞して居た。ウマルは家に入りて低誦を洩れ聞いた。ウマルの足音を聞いたハッバーブは押し入れに隠れた。怒つて這入つて来たウマルが「いま私が聞いたのは、あれは何だ」と怒鳴つた。「何でもありません。」「そうじやない。私はお前たちが先祖の教えを棄てたと聞いたぞ。」サアイードが言つた。「だがウマル君、外の宗教にも君の宗教と同じ真理がないとは限らないじゃないか。」

これを聞いてウマルはいよいよ友人の言が本当だったと思い、いきなりサアイードに飛びかかつて足蹴にした。ファーティマが夫に加勢した。そのどさくさにファーティマは顔に怪我して、血が頬に伝わつた。ファーティマは憤りに堪え兼ねて叫んだ。

「私共は新しい信仰に入りました。私どもはアッラーとその予言者とを信じます。さあしたい

ようにして下さい」と。

ファーティマの顔を流れる血を見てウマルの心は和らげられた。彼は書いた物を見せろと言つた。ファーティマが言つた。

「もし御覽になりたかつたら、身を浄めなさい。浄めた人でなければ決してこれに触れてはなりません。」そこで彼は起つて手を洗い、筆写を取つて読み始めた。彼は思わず叫んだ。

「何という立派な奴だ。また何という優しさだ。」

ハッバーブが押し入れから出て来て言つた。

「ウマル様、神様は屹度貴方を取つて置きの方にしてお出でになるのでござります。現に私は予言者が『神様、アブー・ジャハルか、然らずばウマルによつてイスラームを強めて下さい』と祈つて居られるのを聞きました。」

するとウマルは言つた。

「マホメットのところに案内してくれ。私は信者になつたと申し上げたい。」

かくて彼は早速アル・アルカムの家に往つて戸を叩いた。その時家の中に居たハムザを初め多くの信者は、隙間から彼の姿を認めて、「ウマルだ、ウマルだ」と殺氣立つた。それでもマホメットは彼等を制してウマルを案内させ、彼の着物の裾と剣の皮紐を攔まえて言つた。

「ウマル君、君は何時まで迫害を続けるのか。神様が君の上に災難を下すまでか。」

ウマルの返事は思いがけぬものであつた。

SAMPLE ShoshiShinsut.com

「貴方は予言者です。私はそれを証言します。」

マホメットは心から欣んだ。「アッラーは偉大なり！」彼の口から先ずこの言葉が迸り出た。

この両人の帰信はイスラームに頓に勢力を加えた。わけてもウマルは当時二十六歳、体躯偉大、身長抜群にして人が仰ぎ見るほどの高さであった。大胆にして勇猛、人の肺腑に徹する眼光と万難不屈の意志と烈火の如き感情の所有者であつたので、クライシュ族は皆彼を畏れて居た。この両人が加わったため、信者たちは公然と自己の信仰を表白することになり、大なる自信を以て神殿の周囲に集まり、彼等自身の儀礼を公然とクライシュ族の面前で行うようになった。アル・アルカムの家も最早必要がなくなつた。彼等の勇気は加わつた。同時に恐怖と不安がクライシュ族に昂まつた。

彼等が不安になるのも無理はない。アビシニアでマホメットの信者たちが好遇されて居ることも不快の種であった。彼等はそれ等の信者を連れ戻すために、高価な贈物を持たせて二人の使者をアビシニアの朝廷に派遣したが、国王は引き渡しの要求に応じなかつた。初め彼等は先ず廷臣を説得し、それから国王に持参の贈物を献上して言つた。

「私どもの国の馬鹿者どもが、先祖の教えを棄てました。それで彼等はキリスト教に帰依したのではありません。自分勝手の新しい教えを立てたのであります。私共は彼等を連れ戻るためにクライシュ族から遣わされた者であります。どうぞ聽許下さるよう願い上げます」と。

廷臣は彼等の嘆願を容れるように奏上したが、国王は自らこの事件を取り調べると言った。翌日避難者らは国王の前に呼び出された。キリスト教の僧正たちも同席して居た。国王は彼等は故に先祖の宗教を棄てたかと訊ねた。マホメットの従兄弟のジャアファルが答えた。

「それはメッカの人々が偶像を押し、死んだものを食い、姦淫を行い、親戚の絆や隣人の義務を無視し、親切を失い、そのためにはマホメットが予言者として起つたのであります。」

それから彼等が受けた迫害と、アビシニアに逃れた経緯とを述べ、マホメットの教えの要領を告げた。国王が予言者の教義の一部を読み聞かせよと言うので、彼はマリア章を朗誦した。国王は涙を垂れてこれを聞き、僧正たちもまた泣いて、その涙は彼等が前に開いて置いた経典を濡らした。そして言つた。

「全くこれは同じ源から出たモーセへの啓示と同じ啓示である。」

そこで国王は避難者たちに言つた。

「安心するがよい。私は決して汝等を見棄てない。」

翌日使節等はマホメットのイエス観を語らせて国王の敬意を挑発しようとした。それでも国王は「イエスは神の僕、その使者であり、神の靈と言ふがマリアの胎内に置かれたのだ」という彼等の言に同感した。かくて使節等は得るところなくして帰つた。

外国の君主からイスラームがかかる同情を得て居るという報告は、クライシユ族を不快かつ不安ならしめたに相違ない。アビシニア王は彼等の尻押しをしてかつてアブラハムが試みたる如く

メッカの多神教撲滅を企てないとも限らぬ。仮に左様な外国の援助がなくとも、彼等は既に国内に於て有力なる団体になりつつある。マホメットの信者は最早奴隸や貧民だけではない。有名な市民も次第に彼の信者となりつつある。信者と不信者とは両立すべからざる対抗勢力たろうとして来た。そしてハーシム一家は、独りアブー・ターリブのみならずアブー・ラハブを除く外は、信者たると不信者たるとを問わず、同族のマホメットの生命を守護する点では共同の責任をとるので、この対立は一般の族闘の形をとるに至つた。この目的のためにハーシム一家以外のクライシユ族は、ハーシム家排斥同盟を結び、彼等と縁組を結ばぬこと、彼等と売買を行わぬこと、即ちハーシム家と一切の交際を絶つことを約束した。この断交決議は文書に作製され、三個の印上が捺された。然る後に彼等はこれを神殿に掲げ、その決議条項が神聖不可侵のものとされた。

この強力な敵意に抵抗し兼ねて、ハーシム一家は「アブー・ターリブの谷」と呼ばれる山中の一角に立て籠つた。ここはアブー・クバイス (Abū Qubais) の山麓で、四方懸崖と建物とに取り囲まれ、メッカからこの谷に入るには漸く一頭の駱駝が通れる位の隘路があるだけである。

回教第七年の正月元日の夜、アブー・ラハブ一家を除くハーシム一族は、ことごとくこの谷に退居した。断交は厳重に行われ、ハーシム一族は食糧を初め、生活必需品に困り始めた。彼等は自ら隊商を仕立てるほど富裕でなかつた。外国人が来れば、法外の値段を要求した。クライシユ族は何物をも売ろうとしなかつた、唯だ參詣期だけは一切の流血が禁ぜられて居たので、ハーシム一家も谷を出でて祭礼に加わることが出来た。斯様な状態が三年も続いた。メッカ市民は谷間

の子供が飢えに泣く悲惨な声を耳にするに至った。ハーシム一家の窮状の甚しさを見るにつけ、市民のうちには彼等に同情する者も出て来た。危険を犯して駱駝に小麦を積み、飢えたる人々を見舞う者もあった。ホワイリドの孫ハキームも密かに叔母ハディージャのため糧食を運び入れた。

この籠居の間に、マホメットの伝道は専らハーシム一家の者に対して行われた。また参詣期にはウカーズの市、又はメッカやミナの宿営地に赴いて伝道したが、他部族の信者を獲ることも出来なかつた。のみならず伯父アブー・ラハブは常に彼の後に隨い、彼が説教を始めるところ叫ぶを常とした——「信じてはならんぞ。此奴は嘘吐きの罰当りだ」と、而して遠方の部族から來た者も、同様にマホメットを嘲弄した。——「お前を一番よく知つてるのは同族の者じやないか。追い払いを食つたのは何のためじや。」

二 ユダヤ人との交渉

さてマホメットのこの窮迫時代の啓示は約二十章を算える——六七、五三、三二、三九、七三、七九、五四、三四、三一、六九、六八、四一、七一、五二、五〇、四五、四四、三七、三〇、二六、一五、五一。

この期の諸章は前期のものより長くなり、時々激情を交えては居るが、稳健の度を増し、散文

的になつて居る。地獄、天国、復活についての叙述が繰り返され、またアッラーの存在を証明するため自然現象が力を籠めて説かれて居る。籠居中にふさわしく、信心と忍耐とが力説されて居る。

それにも増して注意すべきは、彼の主張の証拠としてユダヤ人並びに彼等の經典にしばしば言及し始めたことである。これはこの頃からマホメットがユダヤ人又はユダヤ教を知れる者と相当に密切なる交際ありしことを想わしめる。彼は旧約聖書から多くの物語を引用し來たりて、己れの地歩を強化しようとして居る。例えば天地創造と人間墮落、ノアの洪水、アブラハムの話、ダビデ及びソロモンの物語の如きそれである。これ等は稀に聖書の言葉そのままに伝えられて居るが、多くはラビの空想や想像、乃至アラビアの説話によつて歪められ、又は真相を蔽われて居る。

ユダヤ人のうちにはマホメットの唯一神の信仰を喜び、彼に激励を与えた者もあつたと思われる。マホメットの誠実真摯な人格、並びに彼がユダヤ教の經典に対して抱える深甚なる敬意は、ユダヤ人として好意を有たしめたことであろう。古蘭コランにはこの事を暗示する諸節がある。例えば一三ノ三六に曰く「吾がかつて經典を賜いたる者は、汝に啓示せられたるものを欣ぶ」と。而して四ノ二〇（惑の誤り）には實に下の如く言つて居る——「吾がかつて經典を賜える者は、彼等自身の子女を認むるが如くこれを認む」と。また二六ノ一九二以下には下の如く述べられて居る。

げに此は創造の主よりの啓示なり。
そは誠実なる心靈がこれを携えて

**SAMPLE
Showoff-Smirusu.com**

汝の心に降り、汝を一警告者たらしめんとするなり。
しかも平明なるアラビア語を以てなり。

げにそは以前に降されたる経典を立証するものなり。

ユダヤ人中の学者がこれを認めたることは彼等への一休徵に非ざるか。
而してもし吾これを異国人に啓示し

彼これを彼等に復誦するとも、彼等はこれを信ぜざるべし。

四六ノ一〇にはかく言う——「言え、汝等思えるか、もし古蘭ゴランがアッラーより降されたるものなるも汝等これを信ぜず、かつユダヤ人の一人が既にこれを信じたりとすれば、汝等が依然として高慢なるは何たることぞ。げにアッラーは不義の民を導かずと。」この一ユダヤ人とは伝承によればアブドゥラー・イブン・サラーム (Abdullah ibn Salām) と言い、マホメットはモーセが予言せ
る使徒なりと言えりとのことである。

旧約聖書のうち、最もしばしば繰り返されるのは天地創造の話、モーセの故事、ノアの洪水、ソドムの覆滅等で、已れをいたじえ古の予言者に比し、予言者を拒める前代の民を引用し來たりてクライシユ族を警しめる。

三 断交廃止と二つの試練

開教第十年、マホメットは五十歳になつた。ハーシム一家がアブー・ターリブの谷に閉居してから既に三年を経た。彼等の窮迫が余りに甚だしくなつたのを見て、クライシュ族の中に箇様な断交は苛酷にすぎると考える同情者が多くなつた。恰もこの様な時に、マホメットの一友人が、カアバ神殿に掲げられた断交の書札が、白蟻のために食い破られて居るのを発見した。この重大なる報告を聞いたアブー・ターリブはこれを機会に事を解決せんとした。この時既に八十歳を超えた老人は、一団の人々を随えて谷を出て、カアバ神殿に赴いてそこに集つて居たクライシュ族の有力者たちに言つた。

「聞くところでは御身たちの書類が蟻に食われたと言うことだ。もしこの事が本当なら、もう悪意ある断交は止めなさい。またもしこの事が偽りであつたら、私は自分の甥を御身たちの手に渡すから、どうなりと勝手に彼を処置しなさい」と。

一同はこの提議に賛成して直ちに書類を取り寄せた。開いて見ると、果してアブー・ターリブの言つた通りであり、白蟻に食われて読めなくなつて居た。彼等が困惑して居る有様を見て、アブー・ターリブは彼等の不人情と不都合を責め立てた後、随えた一団と共に神殿の前に進み、彼等の悪意から吾々を救い給えと禱つて、直ちにまた谷間に引き返した。

アブー・ターリブのこの神出鬼没の行動は、いたくクライシュ族を驚かした。彼等はなお驚愕から覺め切らぬうちに、五人の有力者が起ち上つて、吾々は断交同盟に反対すると声高く宣言し、武装を具えてアブー・ターリブの谷に駆けつけた。そして谷の入口に立つて叫んだ。

「この谷に避難して居る者は皆出て来い。無事に自分の家に帰りなさい。心配することはありますぬぞ。」

そこでハーシム一家は谷を出て家に帰ることが出来た。クライシュ族も度胆を抜かれて反対する者がなかつた。もしマホメットに暴力を加える者があれば、武器を執つて起つ強力な一党が、いつの間にやら出来て居たのである。

断交同盟の廃止は喜ばしかつたが、数ヶ月ならずしてマホメットは悲痛なる試練を嘗めねばならなかつた。即ちこの事のうちにハディー・ジャ先ず長逝し、その五週間以後にアブー・ターリブもまた長逝した。この時ハディー・ジャは既に六十五歳の老婦であつたが、マホメットはアラビアの風習に従つて若き妻を他に娶ることもなく、最大の愛情と尊敬とをこの一人の妻に獻げて來た。彼女の死は彼の心と家庭とを併せて索莫たるものとした。但し彼等の娘たちはやがてアリーの妻となるべきファーティマの外は、皆成人して他に嫁して居た。

アブー・ターリブとの死別もまた堪え難きものであつた。アブー・ターリブがその甥のために払える犠牲は、彼が如何に無私高貴なる性格なりしかを物語ると同時に、マホメットの為人を最も明白に立証するものである。もしマホメットが誠実無比の人間でなかつたなら、この伯父もあ

れほどまでに肩を入れなかつたであろう。併に彼はマホメットの幼少時代の支柱、青年時代の守護者、壯年以後はその金城鐵壁であり、四十年の長きに亘る恩人である。そして臨終の枕辺に己の兄弟を召び集め、マホメットの保護を彼等に託し終つて世を逝つた。

臨終の床でマホメットは伯父の帰信を嘆願したが、彼は今更自分が改宗すればクライシュ族が死ぬのが恐くての信心だと言うだらうからとて、遂に甥の言を聴き容れなかつたとのことである。但しあブー・ターリブが不信者であつたことはマホメットを保護する上には却つて役立つた。

アブー・ターリブの長逝に遭つて悲嘆に暮れて居るマホメットを見て、從来彼を憎むこと最も激しかつた伯父アブー・ラハブが心を動かされて彼に言つた。

「アブー・ターリブが生きて居た時と同様に振る舞え。神かけて言う、自分が生きて居る限り、何者もお前を害することは出来ぬ」と。

初めクライシュ族は親類の仲違ひを止めたアブー・ラハブの態度を褒めた。然るにアブー・ジャハルが彼を嗾かして、「アブド・ル・ムッタリブはいま何処に居るか」とマホメットに訊ねさせた。するとマホメットは「倫喪者の落ちる処に落ちて居る」と答えたので、彼は激怒して「自分も永久にお前の敵だ」と言い捨て、爾來以前にも増して彼を敵視するに至つた。マホメットの二人の娘がアブー・ラハブの二人の男子に嫁して居るに拘らず、古蘭の一章は両家の敵意の如何に激しかりしかを示す。マホメットが或る時親類を招待して自分の使命について話した時、アブー・ラハブは「そんなことのために吾々を呼んだのか。死んでしまえ！」と怒鳴つて帰つて

往つた。第百十一章はその時の啓示と言われる——

アブー・ラハブの双手は滅ぶべく、彼また滅ぶべし。

彼の財宝は彼を益せず、その所得もまた然り、彼は烈焰の火に燔かるべく

彼の妻は薪を負い

その頸には棗皮の繩かかるべし。

かくて彼はアブー・ターリブの死後に頓に迫害を受けた。或る時は市民が彼の頭に塵をふりかけた。家に帰ると娘の一人が泣きながら塵を払った。マホメットは慰めた。「娘よ泣くな。主がお父さんを助けて下さるから」と。彼は伝道を止めて市民と妥協するか、さもなくば信仰のために死なねばならぬ瀬戸際に立つた。イスラームが勝つか、さもなくば多神教がイスラームを圧勝するかだ。このままではすまなくなつた。彼の信者はたといその中に若干の有力者が居たしても、不信者の多数に比べれば物の数ではなかつた。その上多くの信者はアビシニアに避難して居る。それにこの数年信者の数も殖えず、ウマルとハムザの兩人以後は有力者で帰信する者は一人もない。公けの衝突は出来るだけ避けたいが、如何なるはずみで事が勃発せぬとも限らぬ。すればマホメットも亡び、彼と共にイスラームも滅ぶ。そこでマホメットは伝道の舞台を変えようと考えた。

四 ターイフ伝道

彼は熟慮の結果メッカと繁栄を争つて居たターイフのサキーフ (Saqif) 族の間に伝道しようと決心した。アブー・ターリブを葬つてまだ半月も経たぬ時、マホメットは忠実なるザイド一人を伴つてターイフに向かつた。道はアラファート丘までは参詣路であるが、それから先約四十マイルは荒涼たる岩山の小径を登つてコラ山 (Jebi Qora) の絶頂に達する。そこから道は豊饒なる山谷を縫い、有らゆる果実と美しい花に飾られた沃土の中をターイフの町に行くのである。ターイフに占居するサキーフ族は、姻戚関係で結ばれて居たに拘らずクライシュ族を嫉視して居た。彼等は自分等の神を捧して居た。彼等の部族的自尊と良心とに訴えて、彼等をメッカ人びよに対してイスラームの陣営に誘うことは必ずしも不可能でなかろう。マホメットは先ずターイフの有力な三人兄弟を訪ね、自分の使命を陳べて、新しい信仰に入り、メッカ人に対して自分を助けてくれぬかと相談した。されどマホメットは、この三人からもメッカ市民から受けると同様の反対に会つた。彼等は他の部族の援助を求めなさいと言つた。

マホメットはターイフに十日間滞在した。多くの有力者が彼を訪問したけれど、耳を傾ける者は一人もなかつた。一般市民は、ウカーズの市などで彼の説教を聴いたこともあつたろうし、メッカで重大な問題を起したことを聞いて居たし、多少尊敬を抱いて彼に対して居たであろう。然る

に彼が自分等の神々を棄てよと勧め、町の有力者からは見放され、悄然として落ちぶれた彼の様子を見ると、彼等の尊敬が軽蔑の念へと変わって來た。彼等はこの迷惑な客人を早く逐い出そうと、彼が街を通る時は散々に悪口を浴びせた。そして遂には彼の姿を見れば石を投げつけた。彼らは石を乱擲する市民に追いかけられながら、ターライフを逃げ出した。両脚に怪我して血が流れ出るので、これを庇うためにザイドは頭に負傷した。乱民は郊外の砂原を二、三マイルも追いかけ、小山の麓で漸く引き上げて往った。

疲れ果てたマホメットは、数ある果樹園の一つに逃げ込み葡萄棚の下に息んだ。その直ぐ近処にウトバ (Utha) 及びシャイバ (Shaya) という二人のメッカ人の葡萄園があつた。蓋しメッカの富有的な市民は、多くターライフの谷間に果樹園を所有して居た。今日でもそうである。彼等はマホメットがターライフ市民に逐われて傷つきながら逃げて來たのを見て同情に堪えず、奴隸のアッダース (Addas) はニネヴェから來たキリスト教徒であつたが、マホメットが葡萄を受け取る時「主の御名によつて」と言える敬虔なる様子に心うたれた。二人の間に話が交わされた。マホメットは彼の身許を訊ねて、ニネヴェの義人、マッタイの子ヨナの話をなし「ヨナは自分と兄弟の予言者であるぞ」と言つた。アッダースは直ちにマホメットに帰依した。彼は驚喜のあまりマホメットの手や顔や足にまで接吻した。遠くからこれを見て居た彼の主人たちは何事だらうと驚いた。この献身は、その時のマホメットにとりて無上の歓喜であり、慰藉でもあつたに相違ない。そしてウトバ並びにシャイバも、後にアッダースの感化によつて信者になつた。

好意の葡萄を味わつた後、マホメットはアッラーに祈つた——「主よ、私は自分の無力と柔弱と、人間の前に値打のない者であることを嘆きます。けれど貴方は貧しい者、弱い者の主で、また私の主であります。貴方は誰の手に私を棄てようとなさいますか。私に襲いかかる他人の手にですか。それとも故郷で貴方が私を圧服させた敵の手にですか。もし貴方の御怒りに触れたのでなければ、私はどうあってもかまいませぬ。けれども貴方の恩寵が降れば一層結構であります。私は光顔巍々たる貴方に避難処を求めます。暗黒を払つて、現世来世に平安を賜うのは貴方のことであります。どうぞ神怒と神譴とを私の上に降し給わぬよう願い奉る。貴方の外に力も富もありませんせぬ。」

彼は祈り終えてまたメッカに向かつて歩き出した。途中のナクラ (Nakha) の谷の木立の中に神像を祠れる社がある。メッカ市民が如何にして彼を迎えるかを思い煩つて、彼は一夜をここですごすことにした。彼が幽鬼の一群の帰依を受けたというのは實にこの夜のことである。この時の光景は古蘭の二個所で語られて居る。一は古蘭第四十六章——

吾々は古蘭を聽かんとする若干の幽鬼を汝に赴かしめたり、その読誦せらるるや、彼等は互いに「謹聴」と言い、聞き終るやその民に帰りて警告を与えたり。^(一九) 彼等曰く「吾が民よ、吾等はモーセの後に降されたる經典を聽聞せり。そは以前の經典を確認し、真理と正道とに導くものなり。^(二十) 吾が民よ、アッラーの召呼者に応えて彼を信ぜよ。彼は汝等の罪を赦し、痛ましき刑罰より汝等を護るべし。^(二一) 而してアッラーの召呼者に応えざる者は、地上に於て

アッラーの力を弱むるを得ず、また彼以外に如何なる佑助者もなし。これ等の者は明白なる迷惑の中に在り」と。

他は第七十二幽鬼章。

言え——「吾はかく黙示せられたり。一群の幽鬼耳そばたを側てて曰く、吾等は驚嘆すべき古蘭コランを聴きたり。一 そは正しき道に導くものなり。吾等はこれを信じ、如何なる者をも吾等の主に配せざるべし。二 吾等は信ず、彼は——崇高なるかな彼の稜威は——妻なくまた子なし。三 吾等のうちの頑愚なる者はアッラーについて甚だしく荒誕の言をなせり。四 而して吾等は人間も幽鬼も決してアッラーについて虚偽の言をなすものに非ずと思えるなり。五 ……」

さて数日をナクラにすごしたる後、マホメットはメッカに向かつて出立した。されど守護者なくして入市することの危険なるを思い、一まず道を北方にとりて往年しばしば彷徨したるヒラーリ山に入つた。そこから彼は二度ザイドをメッカに遣わし、有力者の保護を求めたけれど、彼等はこれに応じなかつた。幸いにしてアル・ムティイム (Al-Murīm) が彼の保護を承認した。アル・ムティイムはハーシムの兄弟ナウファルの直系で、瀆神戦争の時にはハルブと共に一族を指揮して武名を馳せ、またハーシム家断交撤去の音頭をとりし一人である。彼は一族の者どもを武装させてカアバ神殿に到り、マホメットを待ち受けることにしたので、彼はザイドと共にメッカに入れるを得た。兩人がカアバ神殿に到着すると、アル・ムティイムは駱駝の上に立ち、集まつて居たクライシユ族に向かつて高声に告げた。

「汝等クライシユ族よ。私はマホメットに保護を誓つた。何人も彼を害することを許さぬぞ」と。

そこでマホメットは進み出て、神殿を拝したる後にアル・ムティイムに護衛されて己の家に帰つた。マホメットの友人なるメディナの詩人ハッサーン・イブン・サービット (Hassán ibn Sábit) はこの義侠なる家長を歌つて下の如く言う。

泣け、吾自らよ、人の首かしらたるこの人のため。

涙滂沱たれ、涕涙乾かば鮮血流れよ。

偉大が人類をして永遠に存命せしむるものとすれば

ばに偉大はアル・ムティイムを今日まで存命せしめたり。

汝はクライシユ族に対して予言者を護らんと誓えり。

巡礼者がラツバイカを叫び、又は巡礼衣を纏う限り

彼等は汝のしもべとなれり。

ターリフから帰つて間もなく、マホメットはサウダ (Sauda) と結婚した。サウダはサクラーン (Sakrān) の妻で夫婦とも早くマホメットに帰依し、アビシニアに避難して居たが、この頃相携えてメッカに帰つたところ、サクラーンが病死してサウダは寡婦となつたのである。この結婚はハイエイジャが死んでから二ヶ月後に行われた。時を同じやうして彼はアブー・バクル (Abú Bakr) の女アーサーイシャと婚約した。この時彼女は僅かに七歳の幼女であり、約束は親友との絆を一層堅くするためのものと思われる。それでも三年後に夙はくも結婚式が挙げられた。

SAMPLE
Shōsei-Shinsui.com